UFO contactee

CAP-JAPAN NEWSLETTER
UFOと宇宙哲学の専門誌
コンタクティー

偉大な惑星から来た兄弟たち
サン・ピエトロ大寺院の異星人

SPRING
1986
92

米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める
巨大な火の玉はUFOだったのか？

テレパシー能力は練習で向上する
地球の哲学と宇宙哲学の相違(完)

UFO contactee　第92号目次

〈巻頭言〉二十一世紀はテレパシー時代か――1

偉大な惑星から来た兄弟たち――野口敏治　2

サン・ピエトロ大寺院の異星人――久保田八郎　8

米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める――ゴードン・クレイトン　18

巨大な火の玉はUFOだったか？――19

DNAには美しいメロディーがあった！――20

テレパシー能力は練習で向上する――遠藤昭則　21

質疑応答(2)――G・アダムスキー　22

〈写真〉初めて姿を見せた天王星――27

地球の哲学と宇宙哲学の相違(完)――松原眞弓　28

GAP短信――32

〈投稿欄〉ユーコン広場――34

〈各地支部大会報告〉山形・仙台合同／福岡／名古屋――36

〈予告〉61年度地方支部大会ーその1ー――37

〈広告〉61年度「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」――38

〈広告〉アダムスキー全集／英文版Uコン――39

全国月例研究会案内――40

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について"知る"機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて"コスミック・パワー"の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた"生命の科学"の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、率仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

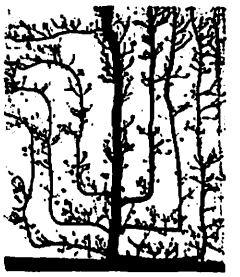
1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

表紙写真はサン・ピエトロ大寺院の正面上部

〈巻頭言〉

二十一世紀はテレパシー時代か



昨年十一月十二日付の新聞に、郵政省は二十一世紀の通信に「超能力」を応用することを計画し、SFもどきの研究に大まじめで取り組むことになったと、やや揶揄気味に出ていた。この超能力とはテレパシーのことらしい。「話もせずに相手の心が読める『超能力』ばかりでなく、物質が動くときに発生するとされる重力波などの研究者ら九名から成る『未来通信メディアに関する研究会』を十一月十三日に発足させ、研究に入った。二十一世紀の通信の可能性を探るのが目的だというが、『オカルト的にはならないよう気をつけます』と担当者は話している。

超能力を応用した通信は、アメリカやソ連が軍事面で利用をめざして研究を続けているといわれるが、わが国で行政機関が真正面から取り組むのは初めてである。音声や電波と異なり、相手先に届くまでの時間がゼロともいわれ、瞬時に通信ができるとされる」

以上が新聞の報道である。まことに結構なことで、少々遅すぎた感をぬぐいえない。オカルト的にならないという点がよい。テレパシーは想念波の送受信による科学的な現象だとされているからだ。心霊的要素を帯びると研究は挫折するだろう。

昔、編者がアダムスキーの『テレパシー開発法』を翻訳して出した当時は一般人の冷笑の的になり、どうしようもないほど相手にされなかった。

以来三十有余年、ついに日本というハイテクを誇る先進国の政府機関がテレパシーの研究を公式に開始したのだ。感無量である。ただし右の新聞記事にはテレパシーのかわりに〝超能力〟という言葉が使用してあるが、これは感心しない。テレパシーは特殊な人だけが持つ能力ではなくて、万人の体内に宿る普遍的能力であって、練習次第でだれでも開発できるからである。それは自転車や自動車の運転能力が万人に潜在するのと同じで、練習するかしないかで差がつくにすぎない。特殊な神秘的能力とみなすとオカルト的になるだろう。

しかしまず人間の内部にテレパシー能力が存在することを〝知る〟必要があるのだが、まだテレパシーを夢物語程度にしか思わぬ人が少なくない。だから郵政省の素晴らしい計画も新聞にからかわれるのだが、これは気にする必要はない。思いきって大胆な計画と研究を推進してもらいたい。

真のテレパシーは、他人の想念が受信者の体内で電話を聞くように声となって響くものらしく、太陽系の地球以外の惑星群に住む偉大な人類はすべてこの能力を持っており、無言の会話を行っているとアダムスキーは著書で述べている。しかしこれを信じない人が多い。

アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』に詳細に述べてある別な惑星群の素晴らしい高度な文明を、これまた夢物語かでっちあげ程度にしか思わぬ人が多いけれども、実際には多数の異星人が地球へ飛来して、ひそかにスペース・プログラム(地球援助計画)を遂行しているとアダムスキーは言っており、編者もその実態を知っている。

この異星人たちは一種の高貴なボランティアであって、危険をかえりみずに地球人のなかに潜入し、この世界の救済活動に専念しているというが、特に全面核戦争の発生防止に全力を傾注しているらしい。これは地球全体が核の大爆発に巻き込まれると、太陽系の他の惑星群にまで悪影響を及ぼすからだという。それほどまでに核の脅威にさらされている地球世界だが、異星人のスペース・プログラムによって助けられている事実をまだだれも知らないようである。

しかし今後五十年以内に、地球人は太陽系内の他の惑星群に偉大な人類と文明が存在することを知るだろう。科学の発達によって、社会全体が緩慢ながらも間違いなくその方向に進んでいるからだ。郵政省のテレパシー研究もその一端を示すものだろう。

あるいは同省の研究会の中には、すでにアダムスキーの本を参考にして、別な惑星群のテレパシーを駆使する進歩した人類の存在を知っている人が加わっているのかもしれない。もしいなければ資料として進呈したいほどだ。

米ソ両大国の首脳部や少数の科学者は、別な惑星群にすごい文明が存在する〝事実〟を知っていながら隠していると、編者は有力情報筋から聞いている。

隠さなくても発表すればよいではないかと思う人が多いだろうが、現状ではしばらく隠蔽するほうがよいかもしれない。もっと大衆の覚醒と知識欲の向上をみるまでは、むしろ鎖国状態を続けるほうがよいだろう。

しかし、この鎖国は永久には続くまいし、続いては困る。人間の精神が次第に向上すればどうしても宇宙の方へ目を向けるようになろうし、新しい大発見も行われるだろう。そして別な惑星群の超高度な文明を知って地球的規模の大騒動が発生するだろうが、これは陣痛であって避けられまい。

これを通過してこそ地球に真の宇宙的な平和な世界が出現すると思われるのである。それはさほど遠い未来ではないだろう。予言めいて恐縮だが、地球にはいつか戦争も貧困も病気もない天国のような世界が実現すると確信する。それは別な惑星群の兄弟たちの援助を受けているからである。

偉大な惑星から来た兄弟たち

――慈愛に満ちた若い医師は異星人だった！

●野口敏治〈日本GAP静岡支部代表〉

大昔から続いてきたスペース・プログラム

昭和六十年八月一日から七日までの一週間、静岡駅ビル「パルシェ」で日本GAP静岡支部が開催した日本GAP設立二十五周年記念「静岡UFO写真展」は一般の人々に多大な影響を与えた。わずか七日間に六千三百名を越える入場者があったことは驚異的だが、それにもましてこの多数の見学者が宇宙の真実を多少とも認識してくれたことに望外の喜びを感じたのである。

この入場者たちは、私がジョージ・アダムスキー氏の素晴らしい書物と最初に出合ったときと同じように、地球以外の惑星に人間が住んでいることを夢想だにしなかったであろうし、しかも私たちの太陽系内のすべての惑星に――アダムスキーはこの太陽系には九個でなく十二個の惑星があると述べている――人間が住み、その人々は地球人よりもはるかに進化し、平和と調和に満ちた超高度な生活をしていることや、さらに巨大な宇宙船を建造して惑星間や太陽系間を旅行していること、そして地球世界を援助してくれていることなどは、まったく驚くべき情報であったにちがいない。

私も最初は大いに驚いてアダムスキー氏の体験記類を次々と読みあさったが、読めば読むほど大きな感動を覚えたし、同時にショックも受けた。

「この地球は大昔、太陽系内外の多くの惑星から来た始末におえない罪人たちの追放場所として選ばれたのです」という事実を知ったときは何とも言えぬ複雑な気持ちになったものである（詳細は文久書林刊アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』に出ている）

その罪人たちが地球に定住して以来、太陽系内の進化した惑星の人々から援助の手が差しのべられてきたという。これは今から何年昔のことか見当がつ

[illegible]の地球人には高度な発達をとげた別[illegible]ムスキーは言っている。[illegible]なるほど確かに異[illegible]惑星から宇宙船に乗ってひそかに飛来した星人とおぼしき人と接触した人がUFOを目撃した人々から正体を隠したまま各種の時と宇宙哲学の研究団体として世界屈指の[illegible]に従事しながら、スペース・プログラム（地球救援計画）を遂行していると、アメリカの高名なコンタクティー（異星人の一人である筆者がみずから体験した[illegible]に接触した人）であったジョージ・アダ[illegible]くべき実話で、愛と感動の物語である。

かない。何万年前か、何百万年前か、スペース・ピープル（高度な発達をとげた惑星の友好的な人々のこと。男をスペース・プラザー、女をスペース・シスターともいう）は、七千八百万年にさかのぼる地球の歴史を知っているということだから、最初の移住はかなり大昔のことだろう。そんな大昔からずっと今日に至るまでスペース・プログラムは続けられてきたという。これは驚くべき事である。

現在の地球は第二次世界大戦が終わってから四十年になるが、その間も小さな戦争は絶えず世界のどこかで起きていたし、今もやっている。

ところが私たちの太陽系では、地球を除く各惑星には数百万年間も戦争というものは存在しないという。この地球はなんというケタはずれに発達の遅れた惑星なのだろう。

大自然を破壊し、同胞を殺傷し、法則に従おうとしない、この貪欲に満ちた地球人を他の惑星の人々はいまだに援助しているのだろうか。

親子兄弟の関係――宇宙は一大家族

親（宇宙の創造主）から生まれた子供（人類）には同じような血液（宇宙の意識）が流れている。同じような血液を持つ子供たちは兄弟姉妹と呼ばれ、兄弟姉妹は互いに助け合って生活している。

この宇宙の人類はすべて同じ親（宇宙の創造主）から生まれたのであるから、他人というものは存在しない。宇宙のすべての人類が血のかよった兄弟姉妹なのである。このように宇宙は一大家族だとアダムスキー氏は言う。

この広大無辺の宇宙には多くの兄弟姉妹がいるが、そのなかには勉強の出来る子供（進化した惑星の人々）もいれば、出来の悪い子供もいる。出来る子供は出来ない子供たちを助けよと親から教えられているので、素直に援助の手を差しのべるし、それを当然のことと思っているので、助けたからといってお小遣いをくれと催促はしない。奉仕し合うことを親から教わっているからである。

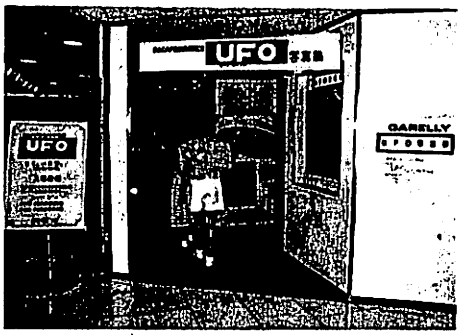
親からの教えを無視し、親を親と思わず、兄弟のいることも忘れ、自分勝手なことばかりしている子供たち（地球人）の目を早く覚まさせようと兄や姉たち（高度な惑星の人々）は援助してくれているとアダムスキー氏は語っている。

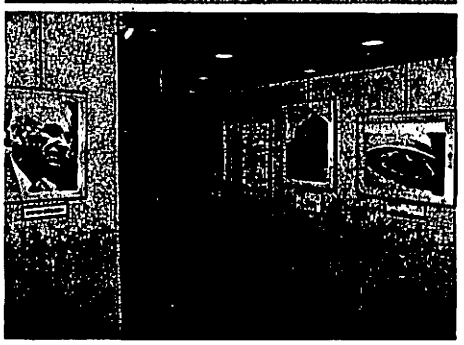
このように偉大な発達をとげた惑星の人々は、宇宙が一大家族であることや、相互援助や奉仕によって社会が成長することなどをよく理解しているので、大昔から地球人を援助に来ているのである。

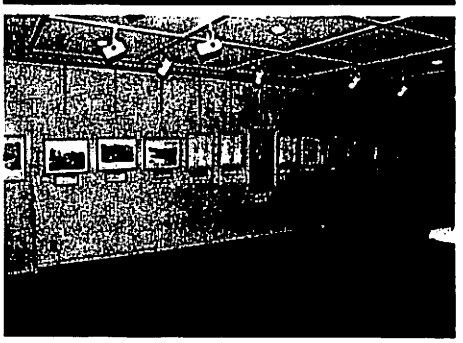
地球に在住するスペース・ピープルにだれも気づかない

二千年前のイエスの活動時代が代表するように、いままで多くのスペース・ピープルがスペース・プログラムの遂行にたずさわってきた（イエスはたびたびスペース・ピープルとコンタクトしたといわれている）

現在では周知のとおりジョージ・アダムスキー氏を介してスペース・ピープルから地球人にたいする宇宙の法則の指導があった。アダムスキー氏は次







▲静岡市で開催されたUFO写真展

のように言っている。

「多くのスペース・ピープルが世界中の産業界や政府などで働いており、また各国の軍隊にも入っていて、同胞を虐殺する訓練の要求されない科学の各部門、通信、医療関係の集団内で働いている」

そのスペース・ピープルは、特定な人以外には自分の正体を絶対に明らかにしないという。大変にテレパシックであったアダムスキー氏でさえも相手がスペース・ピープルであることに気づかないで、彼らの訪問を受けたり話し合ったりしたことがあるというから、ましてや私たちが町で出会ったり話しかけられたりしても、まず相手の正体はわからないだろう。

現在日本国内にも相当数のスペース・ピープルが何らかの仕事につき、日本の進歩向上に寄与してくれていると私は確信している。

また地球に来ているスペース・ピープルのすべてが『宇宙からの訪問者』に出てくるような美男美女ではないと思う。日本に援助に来る場合は、目立つのを避けるために日本人的な人ばかりが志願するだろうし、国々に応じてその国民に似た人々がその国の言葉を完全にマスターして援助に来るだろうから、一般地球人が見た限りでは、まったく区別はつかないだろう。

アダムスキー氏は、「スペース・ピープルは親切で、腹を立てないし、テレパシーの能力が抜群である」と言っている。したがって私たちが相手をスペース・ピープルと見抜くには、自分もテレパシックになって相手から来る想念波動を感受するしかないだろう。こうして直接の指導を仰ぎ得るほどに向上したいものである。

すごいテレパシーで答えた女性

私がこれまでにスペース・ピープルと思われる人と出会った体験（複数）のなかで、出会ったときの前後関係、印象度、その他の要素を加味したもののなかから、二つほど述べてみたい。

昭和五十四年五月二十七日の日本GAP仙台支部大会に参加するため、私は静岡から新幹線で東京へ行き、東京駅のホームで上野行きの電車を待っていた。

当時私は路上で前方へ歩いて行く見知らぬ人々にたいして後ろからテレパシーで「こんにちは」と無言の送信をする習慣があった。というのは、東京月例研究会で久保田先生から「テレパシーの練習は日常どんな所でもできる。たとえば電車に乗っているときでも、ある人を特定して、その人に『こちらを向きなさい』とテレパシーで送信してみるのもよい練習になる」とうかが

ったので、私は町を歩いているときに私の前を行く人に「こんにちは」とテレパシーで挨拶を送りながら歩くのが、当時クセのようになっていたのである。

上野行きの電車を待っているときも、前にいる人に「こんにちは」とテレパシーを送り続けていた。

すると反対側のホームに電車が入り、多くの人が降りて来た。そのなかの一人の女性と視線が合った瞬間、私の頭の中が破裂するかのような強力なテレパシーで、「こんにちは！」という声が頭の中に響いたのである。

私は呆然とし、しばらくは直立不動のままだった。今までにこれほど強力なテレパシーを受けたことはなかったからだ。

電車に乗り込み、吊り輪につかまりながら、今のは一体何だろうかと考え込んでいた。

しばらくすると右手後方が気になるので、振り向いて見ると、先ほどの女性がこちらを見ているではないか！

私はドキッとした。そこで「スペース・ピープルのお一人ですか？」とテレパシーを送ると同時にその方を見つめると、その女性は視線を避けてフッとよそを向いてしまった。

私の心はますます騒ぎだした。再度試みたが相手は視線を避けている。年齢は二十歳代の後半か、顔は少し色白の普通の丸顔、田舎から出てきたような風采のあがらないちぐはぐな服装、髪は肩まで届く直毛という姿で、化粧も野暮ったい。容貌は一般の日本人と変わらず、だれが見ても、どこにでもいるような女性である。

そうこうするうちに電車は上野駅に着いてしまった。その女性も隣のドアーから降りて人込みの中へまぎれ込み、見えなくなってしまった。

はっきりと確認はできなかったけれども、あれほどまでに強力なテレパシーを送る人なら、まず地球人ではあるまい。まして私がホームで「こんにちは」とテレパシーをかたっぱしから見知らぬ人々に送っていることを知っていたのだから、受信能力も相当なものだろう。

最近も久保田先生から、「本物のスペース・ピープルならば、彼らに関心を持つ地球人に出会っても視線を合わせて見つめたり、それらしくうなずいたり、何かの証拠を見せたりすることは、特殊な例を除いて決してしない。むしろ視線を避けようとする。それほどまでに彼らは警戒しているのだ」という話を個人的に聞いて、なるほどと思った。たしかに電車の女性も私と視線が合うのを避けていたし、見たところ普通の乗客のように何食わぬ顔をして窓外をながめていた。したがって確証はないけれども、あの女性は高度に発達した別な惑星から来たボランティア（奉仕活動者）の一人であったと思う。田舎者みたいに見せかけた質素な服装は、おそらくカムフラージュなのだろう。

若い医師の驚くべき反応

数年前、父が病気で静岡市内のある大きな病院に入院したときのこと。病院では主治医の先生が一日に一回診察に来ていたが、このほかにもう一人、二十歳代後半と思われる若い先生がたびたび診察に来た。

ある日、危篤状態の父の病状に関して話があるというので別室でその若い先生から詳細な説明を受けた。

最後に「何か質問はありませんか？」と言われた言葉がきわめて含みのある響きを帯びていたけれども、何も思いつかぬままに「べつにありません」と答えて席を立ち、室外へ出ようとした瞬間、後ろから非常に温かい波動のようなものがくるのを感じた。

それは全身が黄金色の光の輪ですっぽりと包み込まれるような感じである。このようなフィーリングは生まれて初めての経験であった。

そのあと、この若い先生は二人の看護婦さんとともに診察に来てくれた。

診察が終わって部屋を出て行く先生の後ろ姿に向かって、私は声を出さずにテレパシーで聞いてみた。

「先生は別な惑星から来られた方ですか？」

一瞬、先生は立ち止まって振り向き、私の目を見つめて、「そうです」と声を出してはっきり答えた。

「ああ、やっぱりそうだったのか！」

私は感動に全身が震えるのをどうすることもできず、しばし呆然と立ちすくんだ。この場合、明瞭に返事をしてくれたのは、よほど特殊な例だったのだろう。

今になって考えてみると、私がこの若い先生と最初に会って話をしていたとき、奇妙に心が落ち着かなかったのは、私自身の内部に宿る〝宇宙の意識〟が相手をスペース・ピープルの一人であることを知っていて、それを私の心に伝えようとしていたためかもしれない。

別室で話をし、最後に「何か質問はありませんか」と言われた言葉には、「私がだれなのか、まだ気づかないのですか？」という意味が含まれていたのだろう。それで先生は私の鈍感さに呆れて、帰りぎわに後ろから強力なパワーを送って気づかせるようにしたのかもしれない。

ドクターは愛の権化だった

この若い先生は信じられないほど親切に多くの世話をしてくれた。あるときは先生みずから病人の採血をし、本来ならそれを専門の係員に検査させるのだが、すでに時間外で帰ってしまったので、先生が自分の手で検査をして、その結果を報告してくれた。

ときには朝早くから診察に来たり、

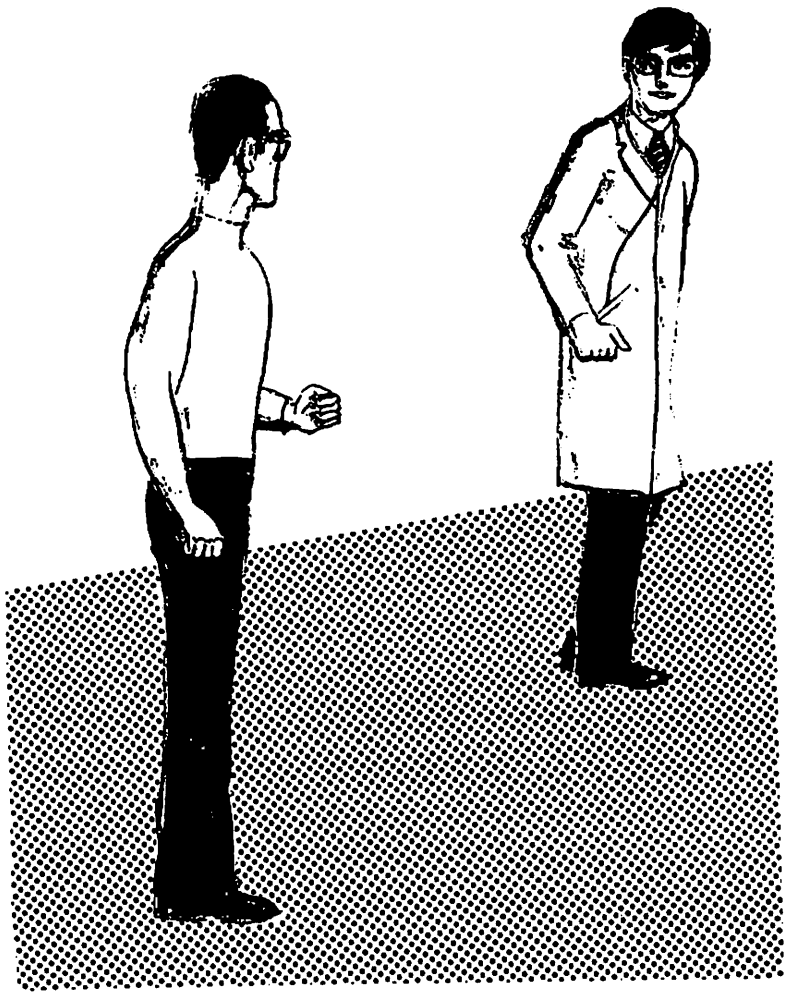
ある夜などは私が仮眠して目覚めたとき、「今、先生が来てくれたよ」と母から伝えられて、そのことを知った。時計を見ると深夜十二時近い時刻である。驚いた私は心の中で「有難うございました」と若い先生に感謝の念をテレパシーで送信した。

すると、しばらくして個室のドアーをノックする音がして若い先生が入って来た。私はまたも驚いた。さっき診て行ったばかりなのに、また来てくれたのだ。

先生はソッと父の顔色をうかがって、無言で出て行った。

その他にもいろいろな出来事があり、ずいぶんお世話になって、父が死亡してから母と弟が診断書をもらいに行ったとき、先生はこころよく書いて下さった上、廊下の所まで二人を見送ってくれたが、そのあとエレベーターの所までついて来て、一緒にエレベーターで一階まで行った。用事で一階まで一緒に降りたのかなと弟は思ったそうだが、病院の外に出ても先生はまだ一緒について来て、駐車場の所まで来た。

母と弟は車で病院をあとにしたが、車が見えなくなるまで見送ってくれた



という。こんなに超親切な医師の存在を私は今までに聞いたことはない。愛の権化というべきだろう。

この若い先生は、見たところ、身長百六十七センチぐらいで、体型はやせ型、黒ぶちの小さな眼鏡をかけており、顔つきは色白ながら日本人そのものであった。いつも物静かで、言葉の少ない人である。

あるとき先生が診断を終えて私の前を通りすぎようとしたので、すでにこの人がスペース・ピープルの一人であることを知っていた私は、「金星から来られた方ですか」とテレパシーで聞いてみたが、先生は顔の表情ひとつ変えず、まったくの知らん顔で室を出て行った。

このように余分なことは一切しゃべらないし、感情を絶対に表面に出さず、しかも心温まるような雰囲気を帯びていた。

黒ぶちの眼鏡はたぶんカムフラージュ用だったと思う。地球式に年齢を換算して一生涯で数百歳も生きるというスペース・ピープルが、目を悪くして眼鏡をかけるとは考えられないからだ。

父が死亡して数カ月後に、他の惑星から来たこの偉大なボランティアは別な都市の医学研究機関へ転勤して行ったらしい。行先は私にはわからない。詮索しようとも思わない。ときどき思い出してはただ感謝の念を送るのみである。

宇宙の兄弟（スペース・ブラザー）から学んだこと

後になって病院での出来事が何を意味するかをあれこれと考えてみた。あの若い先生は高貴な態度を示すことによって次の事を私に学ばせようとしたのではないかと思う。

(1) あらゆる人に親切にしなさい。
(2) いつも心をコントロールして冷静な態度を保ちなさい。
(3) もっとテレパシックになりなさい。
(4) 多くの進歩した惑星の人々が地球へ来て、地球人と一緒に働きながら地球を援助していることを、もっと多くの人に知らせなさい。

これからは私たちが家庭や職場やGAP活動において以上の事柄をみずから実行し、家族や職場の人々や、あらゆる人に良き手本となるような言動を示して、周囲に良き影響を与えるような人間になる必要があるということを痛感したのである。

宇宙的な同胞愛

アダムスキー氏の体験記の中に登場する進化した惑星の人々は、とかく神様か仏様というふうにみなされる傾向があった。宇宙人を宗教の教祖のようにしたグループもある。しかし彼らは神仏のように礼拝の対象にされることを好まない。見かけ上は私たち地球人と変わらぬ肉体を持つ人間である。

ただし彼らはものすごいテレパシーの能力を持ち、高度な知能と科学技術を有し、素晴らしい大宇宙船を建造して惑星間を航行する。しかも地球人が頼みもしないのに地球の進歩向上のために援助してくれている。そして報いを求めないのだ。

一般地球人の想像を絶する惑星から来た人々と病院で一週間毎日顔を合わせていると、分離感はなくなり、新しい兄弟と接しているように感じられた。

だがそれは地球人の兄弟の感覚とは少し違う。穏和、安心感、信頼感、幸福感などの温かいフィーリングでいつも満たされているような気分になるのだ。これこそ彼ら進化した惑星の人たちに共通するあの高貴な同胞愛や一大家族という感覚なのだろう。

もう一人の兄と姉

多くの地球人が、別な惑星から来た人とは知らずに出会ったり話したりしたことが多くあったと思う。これからもあるだろう。私が病院で会った若い先生を地球人として見た限りでは、まったく一般人と区別がつかない。これが親近感をましたの一つの要因でもあったが、とにかく今までのようなスペース・ピープル観を変えて、本当の兄や姉がもう一人いて、優しく見守ってくれているという認識を持つことが大切であると思う。

「知らせる運動」の遂行

日本GAPが第三期のコンタクト時代に突入した。これからのGAP活動は、一般地球人のなかに混じって仕事をしながら、地球世界の発達のために努力しておられるスペース・ピープルの方々の存在をもっと多くの人に知らせる方向に進んで行くだろう。

それはUFO写真展のような一般人を対象とした活動になると思う。その対外活動は特に慎重を期する点もあるので、久保田先生をはじめ先輩の方々の意見を聞いて万全の体制をしながら活動を推進したい。

今日も偉大な発達をとげた惑星の方々の声が聞こえてくるような気がする。

「地球の兄弟諸君！宇宙の多くの惑星に人間が住んでいる。この地球にも進化した他の惑星から多くの人々が来て生活していることを認識しなさい。そしてあなた方のなかに混じって活動している私たち同胞の生き方をまねなさい。彼らから宇宙の生命の諸法則を学びなさい」

今も一瞬の休みもなく地球でスペース・プログラムは進められている。偉大な進化をとげた惑星の方々に心から感謝してこの稿を終えたい。

地球人ではなかった
若い修道士の出現

サン・ピエトロ大寺院の異星人

〈日本GAP会長〉
久保田八郎

昭和五十八年八月十二日、日本GAP旅行団三十六名は、アリタリア航空ジャンボジェット機で勇躍成田空港から飛び立った。目指すはイスラエルの首都エルサレム。恒例の日本GAP企画第五回海外研修旅行「エルサレム宇宙考古学の旅」の門出である。

エルサレムを選んだのは、この都市が史上最大の悲劇と栄光のヒーロー、イエスの最期の地であり、イエス関係の遺跡が充満していることと、イエスの残した宇宙的な波動に触れたいという念願を果たすためである。

といって私たちはクリスチャンではなく、キリスト教という宗教とも一切関係はない。イエスという傑出した人物を、スペース・プログラム（地球救済計画）の一環として惑星の金星から地球へ転生してきた（生まれかわってきた）ボランティアだと認識しているからで、このことはアダムスキー著『宇宙からの訪問者』（アダムスキー全集第一巻）にスペース・ピープルが語った言葉として述べてある。

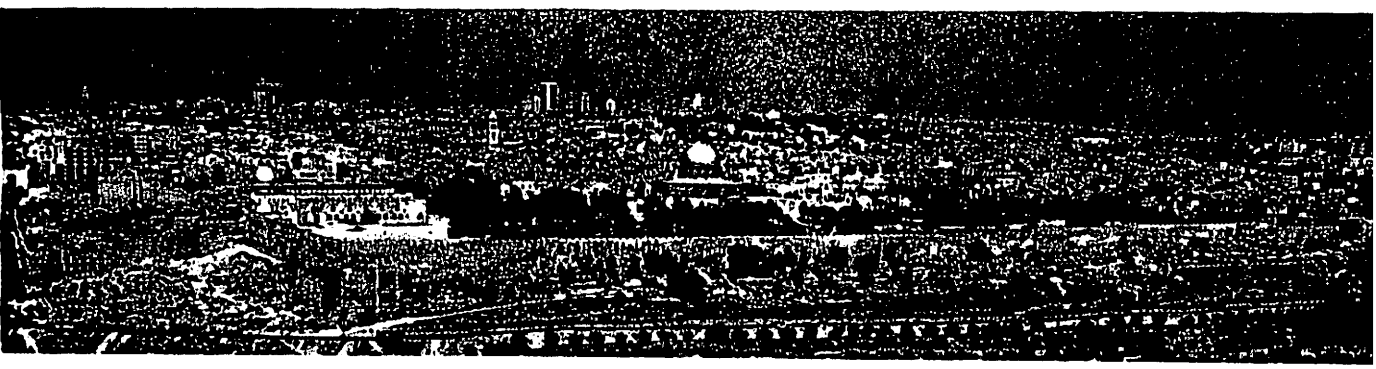
イエスの宇宙哲学はゆがめられた

そもそもイエスの教えは宗教や教団を創立するための教義として説かれたものではなく、宇宙的な愛の哲学であったのだが、よく理解されぬまま曲解されて、ユダヤ教全盛時代の新興宗教とみなされるに至り、パウロが教義をヨーロッパに広めてからは完全に宗教になってしまった。

教義にしても、イエスの言う〝天の父〟は万物を生かし存在せしめている宇宙の意識または宇宙の英知、あるいは大宇宙に遍満する創造パワーというべきものであるとアダムスキーの宇宙哲学では解釈しているが、二千年間、世界の無数のクリスチャンは〝天の父〟を天空の彼方にいる神と考えて、人間と神とを分離してしまった。そして手の届かぬ遠距離に存在する神にむかって祈ったりする。これでは人間に真の救いはもたらされない。だからキリスト教信者が貧困や病苦で喘いだりし、宇宙の法則が伝えられてから二千年も経過しているのに世界は向上しない。戦争による殺戮があとを絶たず、しかも敵を殲滅するために神に祈る信者もいる有様だ。

真の神（宇宙の意識）は万人の内部に宿るのであって、自分の心をその神と合体させるならば心身共に完璧な人間に近い状態となり、どのような救いも実現するとアダムスキーは説いているのだが、その宇宙哲学（アダムスキー哲学）を研究実践しているのが日本GAPという集団である。

話術が巧みであったイエスも多くの比喩を用いてこれと同じ哲学を伝えたけれども、二千年間、ほとんどの信者が真意を理解しなかったという実態に驚くほかはないとアダムスキーは言う。



▲エルサレム旧市街（昭和58年8月14日、オリーブ山より筆者撮影。ホースマンVH-R。スーパートプコール65mm）

またイエスという人は宇宙の神が人間に化身して地上に出現したもので、人々の苦難の罰代わりをして再度天に昇って行ったからイエスを信ずれば救われると説く聖職者も少なくない。

一体、宇宙の創造主ともいうべき神が、地球というケシ粒ほどでもない惑星上に一人間として化身して来るものなのかどうかは、三次元空間としての限界のない大宇宙というものを考察しただけで見当はつくだろう。多年、世界のクリスチャンは地球だけを人間の住む唯一の世界と考えて、その視野で神を設定してきたのである。

だがアダムスキー流に言えば、宇宙のあらゆる天体、あらゆる生命体こそが神の化身だということになる。これは抽象的な汎神論ではなく、万物を形成する原子の核の中に宇宙の生気が宿り、想念を放つという未来科学的な理論を根拠としているのだが、このような理論は来世紀に一般化してくるだろう。

米ソは太陽系の真相を隠している

アダムスキーによると、私たちの太陽系には九個ではなく十二個の惑星があり、しかも全十二個の惑星に人類が住んでいて、地球を除く全惑星には地球人の想像を絶した高度な文明が栄えているという。この詳細は彼の『宇宙からの訪問者』に述べてあるので省略するとして、多くの人がアダムスキーの説を否定する理由は、惑星探査機の報告として金星などはセ氏四百八十度の灼熱地獄であることが判明したので人間や生物が住めるはずはないとか、逆二乗の法則のために地球から遠く離れた惑星群に太陽の放射エネルギーが地球と同じほどに届くはずはない、ということにあるらしい。そして最大に有力な科学的根拠は、米ソ両国の宇宙科学研究機関による太陽系の地球以外の惑星群における知的生命体の存在の否定にあると言う。

しかし米ソの公式発表なるものは真相の隠蔽工作だというのが私たちの見解である。これまで私が集めた多数の情報からみて、この太陽系の地球以外の惑星群にも高度な文明が発達して人類が快適な生活をしている〝事実〟を、米ソ両国の一部のトップクラス科学者や政府首脳部は知って知り抜いているのだけれども、世界的な大恐慌の発生を恐れてひた隠しにしているという証拠があるのだ。

太陽系とブラウン管との比較

物理学の逆二乗の法則（太陽のごとき放射エネルギーは距離の二乗に反比例して弱まってゆくという法則）はたしかに真理であろうが、地球よりもはるかに遠く太陽から離れた惑星上でも地球と同じような温暖な気候が存在する理由として、アダムスキーはテレビ受像機のブラウン管を太陽系と比較して説明している。

ブラウン管ではカソード（陰極）から莫大な量の電子が放出されるが、グリッドとアノード（陽極）の正の高電圧がその電子を引き寄せる。すると電子群は高速度でアノードに引っ張られてそれを通過し、次のアノードの方へ直進する。こうして種々の異なるアノードと正の高電圧を用いれば、理論上は電子群を非常な遠距離にまで到達させ得るのである。

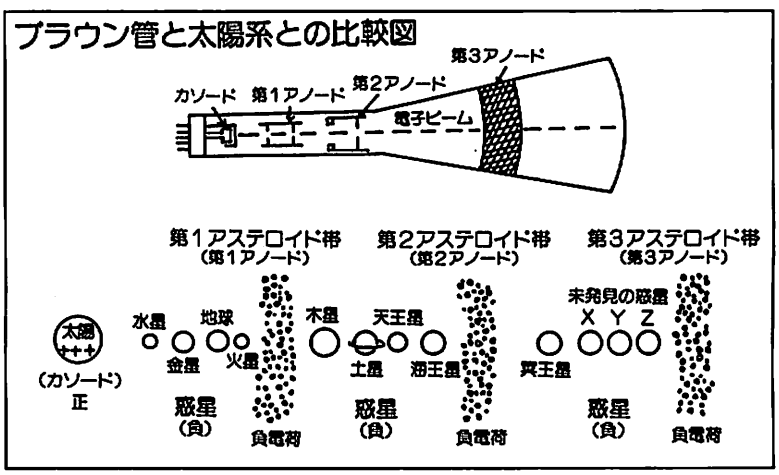
わが太陽系の場合も、ブラウン管のグリッドに似た、火星と木星の間にある第一アステロイド帯が、負の電荷によって太陽から来た正の微粒子をすさまじい吸引力で加速して通過させる。すると微粒子群は海王星と冥王星の間にある第二アステロイド帯に引き寄せられてここを通過する。こうして冥王星どころか未発見の三つの惑星までも地球と同じような光と熱が与えられるという。

この理論もたぶん来世紀には発見されるだろう。いや、すでに発見されているのに米ソは紳士協定を結んで仲良く隠しているのかもしれない。

金星探査機は驚くべき発見をしたのだが——

『宇宙からの訪問者』の中でアダムスキーは主として金星の素晴らしい文明を活写している。夢のような都市と調和に満ちた超高度に発達したテレパシーを駆使する金星人たちの平安快適な生活！　まさに理想郷の極致ともいうべき天国のような世界が隣の惑星に存在しているというのだ！

ところがこれを裏付ける有力な発見が六年前に発表されている。一九七九年に打ち上げられたアメリカの金星探



査機・パイオニア金星1号と2号が送り返した報告によると、金星の空では雷が絶えまなく光り、地面近くでは不思議な白熱光が輝いているという。これは驚くべき大発見だが、なぜか論議の的にならず、忘れ去られてしまった。文明存在の真相に肉迫するような大発見は隠すか、発表してもすぐに引っ込めるのが両国の宇宙開発機関の常套手段であるらしい。このことは月面着陸のアポロ計画でイヤというほど思い知らされた。大衆はだまされないように目を皿のようにして発表事項を子細に調べたり、写真類を検討するとよいのだが、そんなことで労力を費やす人はほとんどいない。こうして大衆は両大国の科学研究機関や政府の発表を頭から真実だと信じ込むのである。

永遠の都ローマへ

さて私たち旅行団がエルサレムに着いたのは八月十三日の夕方である。初めて見る褐色の石造の聖都に感動した一行は、型通りに市内の名所旧跡を見学し、地球人を救うために金星から転生して（生まれかわって）きたというイエスの高貴な波動にひたりながら、心身共に洗われるような思いで各地の遺跡に足を伸ばした。

この詳細は本誌83号と87号に長い旅行記で書いたので省略しよう。とにかくGAP会員なら一度は訪れるべき宇宙的な都である。

風光絶佳のガリラヤ湖を遊覧船で渡ったあと、カイザリア、ヤッフォ、テルアビブへと移動し、十九日の午後五時半にアリタリア機でイタリアの首都ローマに向かった。ローマのレオナルド・ダ・ビンチ空港が帰国の出発点になるので、ここに一泊してローマ市内を見学する日程が組まれていたのだ。

夜八時四十七分にローマ空港に着いてすぐパラティーノホテルへ投宿した私たちは、一夜ゆっくりと羽根を伸ばして休息した。

明くれば二十日、早朝五時半にモーニング・コールで目覚めた一行は、七時にバスで市内観光に出発、まずトレビの泉へ行く。私のローマ見学は二度目だが、二千年前の大ローマ帝国以来の歴史の重みで都市全体が一大博物館の様相を呈している永遠の都ローマをまだ片鱗すら見てはいない。今回も午前中だけのオマケ観光なので、見学場所もひどく限定されるため、ごく重要な部分のみを選んで歩くことになる。これは現地旅行社ナワスの係員フランコ・ヴェンディッティ氏と添乗の田中さんがうまくコースを組んでくれた。

▲トレビの泉（8月20日早朝撮影）

重要人物、ペテロとヨハネ

トレビの泉は早朝のこととて人影もなく噴水も停止したままだ。ここをあとにした一行はバスでローマ最大のハイライトであるサン・ピエトロ大寺院へ向かった。

これはローマのバチカン市国に建てられている世界最大の巨大な寺院で、カトリックの総本山である。サン・ピエトロというのは聖ペテロのイタリア語読みで、イエスの一番弟子であったペテロを祀った聖堂なのだ。

周知のようにペテロはイエスがゲッセマネで捕らえられて大祭司カヤパの官邸へ連行されたとき、あとをついて行って中庭へ入り込んだが、官邸の女中から「あんたもあの男（イエス）の一味だろう」と詰問され、「知らぬ」と答えて逃げ出したものの、「ニワトリが三度鳴く前におまえは私を知らぬと言うだろう」というイエスの予言を思い出して激しく泣いた人である。この話は新約聖書に四カ所も出ているから事実なのだろう（マタイ24、マルコ14、ルカ22、ヨハネ18）。

ペテロとは岩を意味するあだ名で、本名はシモンといい、ガリラヤのベッサイダ出身。弟のアンデレと共にイエスに誘われて最初の弟子になった。ガリラヤ湖の漁夫といわれているが、実際は中産階級の網元だったと考えられており、その家の跡もカペナウムで発掘されている。これはわが旅行団も見学した。

ペテロはイエスに対する忠誠度の最も高かった人で、師の信任が厚く、彼を称賛して「私はペテロ（岩）の上に私の教会を建てよう」とイエスに言わしめたほどの人であった（マタイ16）。

そのペテロでさえもイエスが逮捕されて磔刑に処せられそうになると恐怖心を起こして他の弟子たちと一緒に逃走している。人間の心がいかにアテにならないかを示す好例みたいなものだが、その彼も師の死後には勇猛心をふるい起こして伝道に活躍する。それは死んだはずのイエスが復活して（生き返って）姿を現したからだ。

本来、直情径行型のペテロは言動で勇み足になることもあったが、イエスは彼を愛して高く評価していた。かなり人間味豊かな性格だったらしく、イ

エスがゲッセマネの岩にしがみつきながら、生きるか死ぬかの啓示を求めて脂汗を流しながら祈っていたとき、目を覚ましておれとイエスから注意されたにもかかわらず、他の弟子と共に大イビキをかいて眠りこけていた。このペテロの姿はユーモラスでさえある。

ゲッセマネの師の祈りを目撃したのはペテロ、ヨハネ、ヨハネの弟のヤコブの三人だけで、この三名がイエスの側近の中でも特に親密な主流派を形成していた。

だが前述のごとく、師の磔刑時にペテロは他の弟子たちと共に逃げた。最後まで師を救出しようとして十字架のそばから離れなかったのは十二弟子中ヨハネだけである。

このヨハネが二千年後に転生してアダムスキーという名で出現し、宇宙の法則と他の惑星群の真相を伝える。そしてゴルゴタで悲惨な最期をとげたイエスは二千年後にオーソンという名の金星人としてモハービ砂漠の一角、デザートセンターに着陸する。師弟同士の劇的な再会であるが、この会見の詳細は『宇宙からの訪問者』に述べてある。

ペテロの壮烈な最期

ペテロはイエスがつけたそのあだ名のとおり、岩のように強靭な神経の持ち主で、イエスの死後は使徒たちの中心人物として指導的な役割を演じた。パウロによると、ペテロとヨハネ、それにイエスの弟であったヤコブの三人がイエス亡きあとの柱として責務を分担していたという。

だがこのヤコブは腹の小さい人物で、異邦人にたいして包容的だったペテロに反発し、このために派閥争いが生じることになった。このためかペテロはパレスティナを脱出したあと、ギリシャのコリントへ行ったらしい。

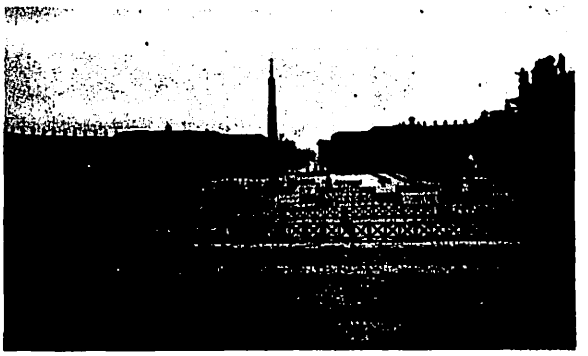
新約聖書はペテロの生涯についてほとんど述べてはいない。ただ伝説が残っているだけだが、それによると、ペテロはローマへ現れて伝道し、暴君ネロの迫害により十字架にかけられたけれども、イエスと同じ方法で殺されるのは畏れ多いと言って、みずから逆吊りを所望して殺されたという。

このことはローマの歴史家タキトゥス（五五―一一七）がその著『年代記』でペテロの殉教ぶりを次のように記していることからも裏付けされる。

紀元六四年にローマで大火があった。当時初期キリスト教徒を嫌っていた残忍な皇帝ネロは、この放火犯人としてペテロを検挙し、多くのキリスト教徒も逮捕して惨殺した。彼らは野獣の皮を着せられて競技場に放り出され、猛犬に襲われて食い殺されたり、十字架につけられて火あぶりにされた。ペテロも共に殺されたのである。

この競技場というのは現在残っている巨大なコロセウムのことではなく、もとはサン・ピエトロ大寺院の裏側あたりにあったらしい。大寺院前の大広場の中心部には紀元四〇年にカリグラ皇帝がエリポリスから持ち帰った高さ二十五・五メートルのオベリスクが立っている。ペテロはこのオベリスクの位置で死んだのだと観光客はガイドさんから聞かされるが、真相は不明である。

このオベリスクはもとネロが建造した大競技場の中心に建っていたのを、一五八六年に法王シスト五世が現在地に移した。したがってペテロがここで死んだという説は信じがたい。



▲サン・ピエトロ大寺院前のオベリスク（8月20日撮影）

ただしペテロの遺体を葬った墓は、サン・ピエトロ大寺院の中央祭壇下にあるという昔からの伝説に従って、一九四〇年代から五〇年代にかけて法王ピオ十二世の許可のもとに発掘した結果、それらしい遺骨が出たという。これがペテロのものと断定はできないにしても、碑銘は当時のキリスト教徒の迫害を裏付けるに足りるものだった。

サン・ピエトロ大寺院建立の歴史

八時十分にバスを降りた私たちはサン・ピエトロ大広場へ入って行った。一六五六年から十一年の歳月をかけてバロックの巨匠ベルニーニが完成させた横の最大径が二百四十メートルある楕円形の広場のむこうに、朝の陽光を浴びた巨大な褐色の大聖堂が燦然と輝いている。

伝承によると、ローマへ伝道に来たペテロがまず小さな礼拝堂を建てて、これがローマ教会の源流となった。しかしキリスト教徒の大弾圧により消滅していたところへ、キリスト教を国教に制定したコンスタンティヌス帝が、三二六年にペテロの墓の跡へ最初のバシリカ（教会堂）を建立した。

この教会は内部に豪華な装飾が施されて約千年の寿命を保ったけれども、老朽化して崩壊の危機にさらされたので、一五〇六年に法王ジュリオ二世が雄大な再建計画を打ち出したのである。

最初はルネッサンスの建築家で画家であったドナート・ブラマンテに白羽の矢が立てられた。彼はギリシャ十字（縦線と横線が同じ長さの十字形）のフロア・プランで設計を進めたが他界したため、ラファエロが引き継いでラテン十字形（縦線の下が長い十字形）に変更したけれども、これまた他界し、一五四六年にミケランジェロがあとを継いで高さ百三十五メートルの大ドームをギリシャ十字形にもとづいて完成させた。

ミケランジェロの没後はポルタ、フォンターナ、マデルノ、ベルニーニといった歴代の巨匠たちが建築の設計監督を担当し、一六二六年十一月十八日に、法王ウルバーノ八世によって、完成した大聖堂の献堂式が行われたのである。

大聖堂内部は一大美術館

まず正面（ファサード）を見上げると、横百四十五メートル、高さ四十五メートルの豪壮な大建築のなげし上に、十字架を左手にしたイエスの像を中心にヨハネその他の十二使徒の内、十人の弟子の像が立ち並んでいる。裏切り者のユダは除外してある。ペテロの像は本堂前の左手の地上に建っており、これと対照的に盟友であったパウロの像が右手地上にある。

内部へ入ると、その広大さに一驚を喫する。ラテン十字形にもとづいて建てられた本堂の奥行きは二百十一・五メートル、幅は二十七・五メートル、高さ四十六メートルという巨大なもので、しかもここにはルネッサンス以来の大芸術家たちの手になる彫刻や壁画が飾られて、さながら一大美術館の様相を呈している。

入口から入ってすぐ右側には名高いピエタがある。ミケランジェロ二十四歳のときの名作。イエスの遺体を抱いて悲嘆にくれる母マリアの大理石像が、見る者を感動の渦に巻き込む。

その他、本堂中央部の最後の柱の下にある五世紀頃の聖ピエトロのブロンズ座像、その側にあるベルニーニ作の聖ロンジーノ像、その他の彫像や壁画類で圧倒されて立ちすくむばかりだ。

ペテロの椅子を探す

私たちはまず大寺院をバックにして旅行団全員の記念撮影を行った。三脚の故障でセルフが使用できないので、私がカメラ（ホースマンVH－R）を手にしてシャッターを切った。

そのあと一同は平野さんという現地在住の女性ガイドさんの先導でぞろぞろと本堂内へ入って行った。

私は五十三年八月の出版屋時代に実施したエジプト・ヨーロッパ旅行でここに一度来ているので、初回ほどに驚嘆と感動の念は起こらなかったが、一

▼サン・ピエトロ大寺院をバックに記念撮影。このあと一同は中へ入った（8月20日朝8時30分頃）。

つの目的はあった。それは二千年前にペテロが使用した木製の椅子の本物がこの大聖堂内に保存してあるということを資料で読んだので、今回はぜひともそれを見たいと思ったのである。そしてその椅子は大聖堂内のどこかに展示してあるものと簡単に考えていた。

そこでガイドさんと共にゆっくりと移動しながら一通りの説明を聞いたあと、一同と離れて椅子の安置場所を探し歩いたが、どうも見つからない。あちこちで黒衣を着た坊さんたちに英語で尋ねてみるのに、ここの坊さん方は全く英語を知らず、話が通じないのだ。秘跡の礼拝堂のそばあたりにいた案内係の坊さんに聞くと、「イングリッシュ・ノー」と言って笑いながら手を振る。一人の修道女をつかまえて聞いたが、やはりだめだ。

カトリック神学を勉強する修道士たちは英語などをやらないのだなと思いながら、ピオ八世の墓のあたりまで来たとき、石川敏雄君（東京）が奥へ通じる通路からひょっこり出てきた。

若い修道士が出現

「ペテロの椅子を探しているんだが、あんた、あり場所を知らない？」と聞くと、いまこの通路のずっと奥まで行ってみたが、行き止まりになった所の奥に立派な部屋があるらしい、そこにあるのではないかと言う。

よし行ってみよう、と私は通路を奥に向かって歩き出した。このときは遠藤昭則夫妻（千葉県）、今西行雄君（神戸）その他一人か二人が一緒にいた。

この長い通路は大聖堂の左手に付属する建物に通じるらしく、途中にはいくつもの部屋がある。多くの修道士たちに出くわすが、私たちを見ても何も言わないので、図に乗って奥へ奥へと進行する。

すると、通路の切れる行きどまりのような所へ来た。あたりには坊さんたちがうようよしている。見ると左側に何やら由緒ありげな部屋がある。

ここだ！とばかりにその方へ入ろうとすると、一人の中年の坊さんが驚いた様子で両手を広げて「ノー、ノー」と言いながら阻止した。その部屋へ入ってはならないということらしい。

そこで私はペテロの椅子を見たいのだが、それはどこにあるのかと英語で質問したところ、これまた英語が全然出来ぬとみえて、当惑したような顔をしている。

そのとき相手の坊さんは私から見て右手を指さして、「あれだ、あれだ、いい人が来た」というような仕草をする。見ると一人の若い立派な顔だちの修道士がこちらへやって来た。

あの人なら英語が出来るということを坊さんは言おうとしているらしい。

私は折よく出現した若い坊さんの方へ歩み寄って、ペテロの椅子を見たいのだがそれはどこにあるのかという意味のことを尋ねてみた。この当時、私は英語の発音をアメリカ式からイギリス式に切り替えていたので充分に通じたとみえる。英語の話せるヨーロッパ人はみなイギリス発音でやっているのだ。

私の質問にたいして若い坊さんは見事なイギリス英語で即座に答えた。

「ペテロの椅子はあちらの大聖堂の奥の祭壇（オールター）の所に保存してあります。ここにはありません」

「奥の祭壇（オールター）とはどのあたりですか？」

中央祭壇しか知らない私が聞き返すと、若い坊さんは言った。

「じゃ、そこへ案内しましょう。一緒にいらっしゃい」

他の人とは違う修道士

親切な坊さんと並んで私はもとの方向へ通路を歩き出した。一同もぞろぞろとついて来る。

この若い坊さんは二十七、八歳ぐらいで背が高く、身長は一メートル八十センチ近くある私と同じぐらいか、少し高めで、黒い僧衣を着ていた。服装は他の坊さん方と同じだが――ただし階級の差を示すシルシがあるはずだが素人にはわからない――、ひとつだけ著しい相違点があった。

この大寺院にいる多くの坊さん方はみな、ひからびたような顔をしているのに、この若い坊さんは血色がよくて、見るからに溌剌（はつらつ）とした顔つきをしているのだ。およそ坊さんらしくないので、最初見たときに意外な感じがしたほどである。

容貌は全くの白人タイプで、北欧系を思わせるような端整な顔つきだ。スカンディナビアあたりから神学を学ぶためにローマへ留学してきたのだろうか――。

むかしアダムスキーがこのバチカンで法王ヨハネ二十三世とひそかに会見した有名な事件を大聖堂に入る前に皆さんに説明したのだが、通路を歩行中またもこのことが脳裏をかすめた。

アダムスキーとローマ法王との会見

一九六三年、アダムスキーは二度目のヨーロッパ講演旅行に出発した。各国を歴訪した後、彼は五月三十日の夜八時にローマに着いてホテル・アウリガに投宿した。通訳兼ガイドとして随行したのはスイスのアダムスキー派活動家ルウ・チンスターク女史と、ベルギーGAPリーダー、メイ・モルレ夫人である。

翌三十一日、金曜日の午前十一時、アダムスキーは両婦人を従えてサン・ピエトロ大寺院へやって来た。スペース・ブラザーズから託されたメッセージを法王ヨハネ二十三世に手渡すためである。

大聖堂の入口前の石段の所まで来てから、アダムスキーは左手のスイス人衛兵のいる特殊な通用門の方へ歩いて行き、門の奥に僧服を着た一人の男が立っているのを見て「私の友人があそこにいる！」と二人に言い、一時間後に出て来るからここで会おうと言い残して中へ入って行った。すでにフリーパスの許可証が与えられていたらしく、衛兵は何も言わずに通過させた。

出迎えた男は異星人だったようで、スータンと呼ばれる長い僧服をアダムスキーに着用させて建物の中へ入った。

これを見届けた両婦人は大寺院内を見学してから、一時間後に元の位置へもどって待機していたところ、喜色満面のアダムスキーが出てきて、「ローマ法王に会ったぞ！」と少年のように嬉しそうに語ったのである。

彼の話によると、法王はアダムスキーが差し出した白い封筒の方へ歩み寄って、「これこそ私の待ち望んでいたものだ」と言ったという。続いて二人はかなりの時間、話し合い、最後に法王はアダムスキーの頭上に手をあてて祝福した。その部屋を出たあと、アダムスキーは一時間ほど建物内にとどまって、異星人の修道士と語り合ったという。

この件については私が九年前の五十一年十一月、ジュネーブでルウ・チンスタークに会ったときに詳細を聞いたし、五十三年の八月にはパリでメイ夫人からも聞いたので、法王との会見は事実である。また五十四年十一月二十三日に東京の科学技術館で開催された日本GAP総会で、招待により来日したメイ夫人が講演でアダムスキーと法王との会見について触れていたから、出席した読者はご記憶のことと思う。

最初の印象に従えばよかった

だがメイ夫人は一つの失敗をした。三人が大寺院をあとにしてホテル・アウリガへもどったとき、アダムスキーはロビーでだれかを待とうとする様子を示すので、彼女も一緒にとどまろうと思ったのだが、ルウが「部屋へ帰って休みましょうよ」と言うので、うっかり釣られて部屋へもどったのだ。

その間にバチカン宮殿の高位の人がホテルを訪れて、アダムスキーにメダルの入った小箱を贈ったのである。

あとで両婦人がロビーへ降りると、いまバチカンから高位の人が来てメダルをくれたとアダムスキーが語るので、メイは地団太を踏んで残念がった。ロビーに一緒にいれば贈呈する場面が目撃できたからだ。

「あんたは自分の最初の印象に従えばよかったのだ」と言ってアダムスキーは忠告したという。

◀観光馬車でローマ市内を見学するアダムスキー。左はメイ・モルレ夫人(メイ夫人提供)。

バチカンの高官がその日の午後ホテルのアダムスキーを訪れたことは、ホテルからの証言の手紙をイギリスの研究家、ロン・キャズウェルが受け取っているので間違いない。

この頃すでにルウ・チンスタークはアダムスキーにたいして反感を抱いていたらしく、私がジュネーブで会ったときもアダムスキーの体験をけなすようなことを言っていた。

これはアダムスキーが彼女のある種の性質を見抜いて信用しなくなったために腹癒せとして反発するようになったのではないかと私はみている。メイも彼女をこころよく思っていないらしく、メイの東京滞在中、私がルウの話を持ち出すと不快な表情をするのが常であった。この頃は再婚してメイ・フリットクロフト夫人になっていた。

横道にそれるが、一九八三年にルウ・チンスタークはイギリスのUFO研究家ティモシー・グッドと共著でアダムスキーに関する英文の本をイギリスから出している。私も知人から借りて目を通したが、内容は支離滅裂なもので、アダムスキーから離反したかつての助手たちの師にたいする悪口なども並べたててあり、まともに読む気になれないひどい書物になっていた。これはアダムスキーを不利にする目的で書かれたとしか思えない。サイレンス・グループ（アダムスキー問題を抹殺しようとして暗躍する団体）にとっては絶好

の資料になるだろう。

若い坊さんは金星人だつた！

私は若い坊さんと並んで長い通路を歩いて行った。そしてアダムスキーの法王との会見を手引きした異星人僧のことを思い出して、この若い坊さんもひょっとしたら異星人ではないかという想念が一瞬かすめたが、ペテロの椅子が見られるという期待感が強すぎて、すぐ消えてしまった。一同もあとをついて来る。

大聖堂内へ引き返してから、坊さんは中央祭壇のそばまで来て立ち止まった。左側に並んで立っている私の顔をときどき見ながら説明する。

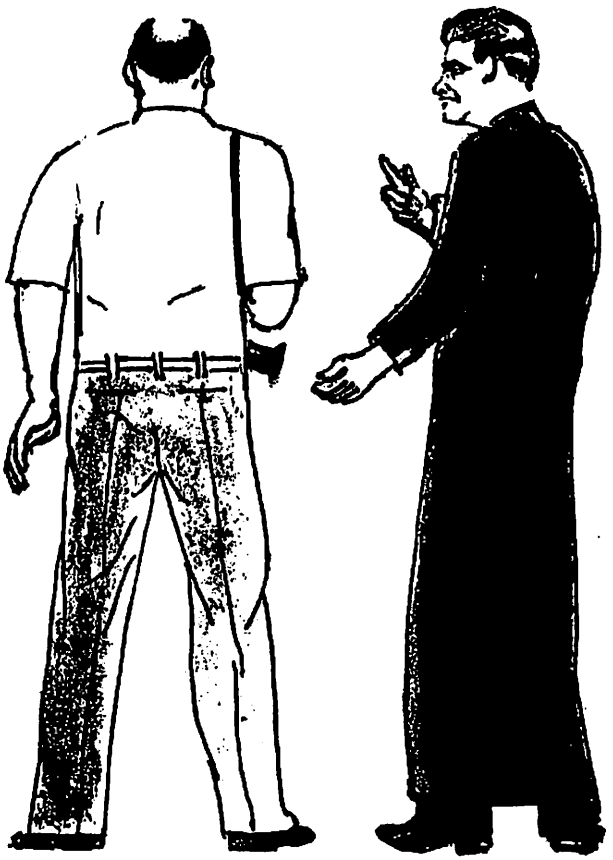
「ごらんなさい。あの奥に大きなブロンズの椅子があるでしょう。四人のビショップ（司教）がそれぞれ椅子の脚をかかえているでしょう。あのブロンズの椅子の後ろにペテロの椅子が保存してあるのです」と冒って指さす方向を見ると、巨大な椅子の曲がった脚を四人の高僧が持ち上げているブロンズの案晴らしい像がある。

これは司教座といわれるもので、ペルニーニの名作である。前側にいる二人の司教はローマ教会、後ろにいる二人はギリシャ教会の司教であることを後に知った。

「そうすると、ここからはペテロの椅子は見えないのですか？」

「ええ、見えません」

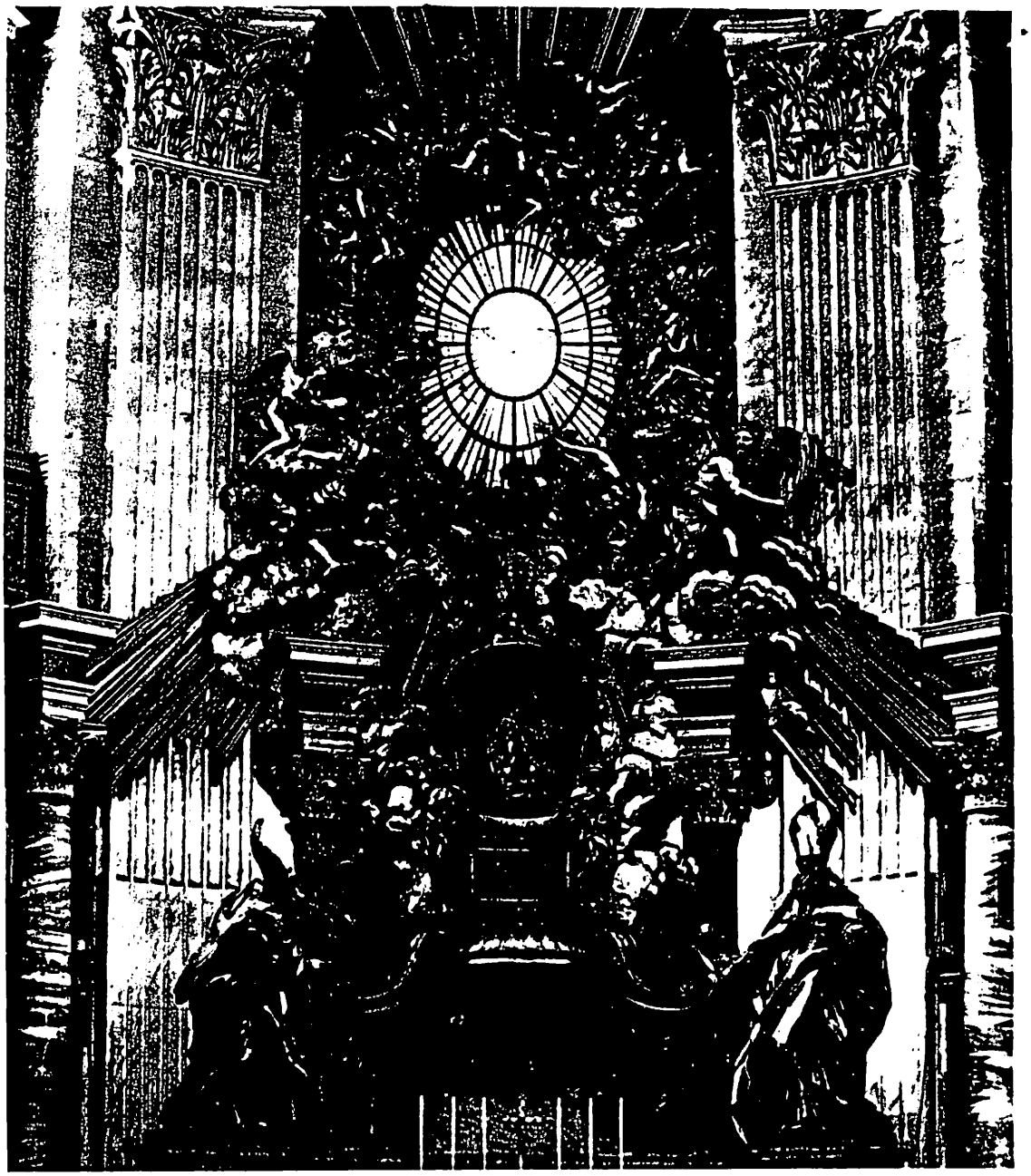
坊さんがきれいな英語ではっきりと答える。その顔は私の顔と五、六十センチしか離れていない。相手の息のニオイが流れてくるほどの距離だ。逆に私の口中のジンタンのニオイに相手は気づいたかもしれない。



失望した私は一同に通訳し、丁重なお礼の冒葉を述べて立ち去った。坊さんもあっさりと去って行った。そしてそのことは忘れてしまった。

ところがそれから二年数カ月経過した今年（六十年）の十一月に、ある理由によって、あの坊さんが間違いなく異星人であったことを知ったのである。金星人だということだった。

そういえば、あの修道士は最初からハッとさせるような要素を帯びていたし、まるで私たちを待ち受けていたかのようにタイミングよく出現した。テレパシーで事前に感知していたのだろ



▲ブロンズの巨大な椅子をかかえる4人の司教。この大椅子の後ろにペテロの椅子が保存してある。
（ローマ在住美術建築写真家・岡村崔氏撮影提供）

うか。

地球人と変わらないスペース・ピープル

今の私はあの坊さんが異星人であったという事実に少しも驚かない。むしろサン・ピエトロ大寺院や付属するバチカン宮殿のごとき世界のカトリック信者に重要な影響力を持つ宗教機関に異星人が入り込んで何らかの援助活動をひそかに行うのは当然だと思う。

だがあの大寺院にいる数百名の坊さんたちは、異星人が修道士となって一緒に働いているとは夢想もしないだろう。それほどにスペース・ピープルは私たちと同じ肉体を持つ人間そのものであり、外観に差はないのである。この他にも私は異星人に出会った経験があるけれども、やはり見かけ上は地球人そっくりだった。

こうして彼らは地球の各地でさまざまの職業につきながら連絡網をしいて、地球の諸状態の観察や研究をしたり、援助活動を行って、地球社会の進歩向上に貢献しているのであって、これをスペース・プログラム（地球救済計画）というのである。このことはアダムスキーも著書で充分に説明しているし、前述の事実でもわかるのである。

ただし彼らは少数の特殊な人以外には絶対に正体を洩らさない。危険防止のためだ。といって地球人を嫌悪し軽蔑しているのではない。それどころか

限りない愛と同情の念をもって〝未発達な弟妹たち（地球人）〟の向上のために、ボランティアとしてひそかに地球人を援助しているのである。

警戒は厳重

ただし乱暴な地球人が危害を加えることを考慮して極端に警戒していることは間違いない。私の知る限りでは、GAP会員のごとくスペース・ピープルや地球外惑星文明に真剣な関心を持つ人といえども、どこかでスペース・ピープルらしい人に気づいて、テレパシーで「あなたは別な惑星から来られた方ですか？」と質問しても、質問者がよほど特殊な人でない限り、微笑してうなずいたり、ジッと見つめたり、その他何かの仕草をして証拠を示すようなことは決してしない。むしろ視線を避けようとするのが普通である。それほどまでに警戒しているのだ。

したがって、それらしい人に気づいても執拗な詮索はしないほうがよい。相手にとって迷惑になるからだ。むかしアダムスキーの本を読んだ女子大生のグループが「宇宙人を探す会」というのをつくって東京中を探し歩いたが成果はなかったという話がある。こんな興味本意や猟奇趣味的な行動は絶対につつしむべきである。だいいちスペース・ピープルはものすごいテレパシーの能力と地球人が足もとにも寄れないほどの高度な知能を持っているから、地球人が単なる好奇心でもって面白半分に追跡しても出会えないだろう。

彼らは聖人でもなければ四次元世界から来る変幻自在な怪人でもない。我々と同様の肉体を持つ現実の生きた人間であり、彼らが遂行しているスペース・プログラムは厳然たる現実の出来事なのである。

したがってスペース・ピープルについて幻想的・童話的宇宙人のイメージから一歩も出なかった人は認識を改める必要がある。彼らは重力場発生エンジンを搭載した金属製の素晴らしい大宇宙船に乗り込み、地球のどこかにひそかに着陸し、この世界で見かけ上地球人になりすまして働く高貴な援助者である。文字どおり〝天使〟なのだ。

アダムスキーは真実だった

「地球人は悪鬼のような者ばかりではない。善良な人も多いのだから、スペース・ピープルも多くの人にもっと公然と正体を洩らしてもよいではないか」と言う人が多い。

たしかにまじめにUFOや地球外惑星の文明に関心を持つ人なら、だれしもそう思うだろう。だが現在の地球世界はきわめて複雑であり、人間の精神の状態も彼らを公然と受け入れるほどの準備が出来てはいないとアダムスキーは言っている。

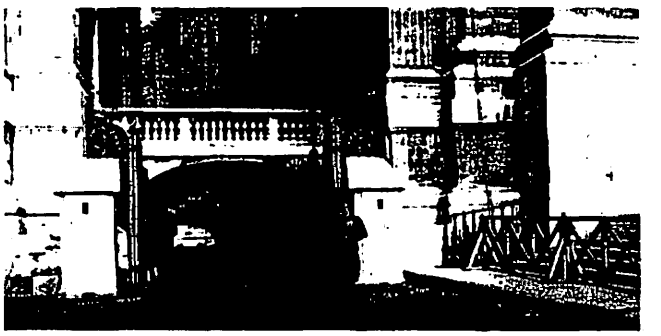
そうかもしれない。善良ではあっても別な惑星群の文明や人類の存在をいまだに夢物語としか考えぬ人や嘲笑する人が多いからだ。

そればかりではなく、UFO研究家のなかにもアダムスキーが伝えた地球外惑星群の素晴らしい文明に関するインフォメーションを真向から否定する人が少なくないし、アダムスキーをウソつき呼ばわりするニセ・コンタクティーも何人かいるような現状である。これではスペース・ピープルも安心して表面に顔を出すわけにはゆかないだろう。

彼らの宇宙船である円盤や母船が空中に出現するのを目撃した人は世界に無数にいるけれども、このUFOなる物の存在をいまだに否定する科学者や聖職者があとを絶たない。しかし私は多くの理由によりアダムスキー問題は絶対に真実であったと断言したい。

スペース・ピープルに気づくには

一方、この宇宙的な問題について真剣な誠実な態度で、強固な信念をもって探求し、スペース・プログラムに協力しようとする人は、自分の心を〝宇宙の意識〟と一体化させ、テレパシックになることによって、スペース・ピープルの正体に気づくことができるようになるとアダムスキーは説いている。



▲サン・ピエトロ大寺院左横の通用門。ここからアダムスキーが入って行った。立っているのはスイス人衛兵（8月20日撮影）。

心と心の交流ではなく、魂と魂の交流によって可能になるというのだ。

このことを詳細に説明した素晴らしい記事がある。アダムスキー全集第三巻『UFOとアダムスキー』の98頁から101頁にかけて「ブラザーズ（他の偉大な惑星から来た兄弟）を見分ける方法」と題して掲載されている解説がそれだ。一土星人が語るこの深遠な生命哲学こそ、地球のいかなる宗教や哲学をも陵駕した〝大宇宙の声〟ともいうべきものであろう。短い文章だがコンタクティーを目指す人の必読の記事である。

〈掲載写真の内五点は筆者撮影〉

〈イラスト　高梨純一〉

〈英フライング・ソーサー・レビュー誌 一九八五年十月発行号より〉

米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める

ゴードン・クレイトン
久保田八郎 訳

米科学雑誌『オムニ』一九八五年八月発行号のUFO最新情報欄に、ジェローム・クラークの報告記事として、アメリカのトップクラス科学者の一人、ロバート・サーバチャー博士が最近のインタビューで、米政府が隠していた墜落したUFOについて知っていることを認めたという。

アメリカ紳士録に出ている博士の経歴は、プリンストン大学とハーバード大学を卒業し、ジョージア工科大学大学院主任教授に就任し、現在はワシントン工科大学の学長である。

同博士の確証によると、一九五〇年九月十五日にワシントン市の自分の事務所にいたとき、(当時彼は米政府の名誉職として、米国防省の合同調査開発委員会の科学顧問の任についていた)、カナダの電気技師ウィルバート・B・スミスが来訪し、墜落したUFOに関する真相のすべてを語ったという。この事件は米政府が隠蔽していたもので、政府のトップクラス科学者、ヴァヌヴァー・ブッシュ博士と他の人とが調査していたものである。

サーバチャー博士は次のように洩らした。第二次大戦直後に政府関係の仕事についていた当時、その墜落したUFOは「極端に軽くて非常に頑丈な材料から成り、見たところ、すさまじい加速と減速に耐えられるように作られていた」

あるときサーバチャー博士はオハイオ州デイトンのライトパタスン空軍基地の会合に招待された。そこでは職員たちが国防省合同調査開発委員会に関係している科学者たちにたいして、彼らの発見事に関する報告をしていた。

サーバチャーはそのとき別な約束があったので、その特別な会合には出席しなかったが、ヴァヌヴァー・ブッシュ博士や有名な数学者のジョン・フォン・ノイマン氏らを含む出席者たちは、その墜落した乗り物(複数)は、「別な太陽系から来た宇宙船であるように思われた」と聞かされたのである。

ジェローム・クラークは次のように続けている。

「米政府のUFOに関する秘密事項を多年追跡してきたジャーナリストのウィリアム・ムーアは、サーバチャーの証言を重要なものとみなしている。ウィリアム・ムーアによると、名声のある人が表面に出て、ペンタゴン(国防省)が押収したUFOを持っていることをおおやけに述べたのはこれが最初であり、これはもちろん確実な証明にはならないが、我々が他のソースから入手している情報と一致するという」

現在だれもが知っているように、レナード・ストリングフィールドやウィリアム・ムーアらの調査活動のおかげで、アメリカ人が押収した墜落した円盤や小さな乗員の死体のほとんどが隠されているのは、ライトパタスン空軍基地であることに間違いない。

(原著者注=墜落した円盤の驚異的な強度と頑丈さに関する記述は、フランク・スカリーの古典的な書物『空飛ぶ円盤の背後』の第十二章と、チャールズ・バーリッツとウィリアム・ムーア共著『ロズウェル事件』の第四章に出ている。スカリーの書物(一九五〇年代に出た)を嘲笑してバカげたインチキだと葬り去ることは依然として行われているが、これは政府筋による歪曲と洗脳がいかに効果的であったかを示すにすぎない。

というのは、一九五三年にエドワード・ルッペルト大尉は(彼はその頃、米空軍のUFO調査機関プロジェクト・ブルー・ブックの長を辞任したばかりで、その後一九五六年に『UFOに関する報告』という著書を書いた)スカリーと語り合っているときに驚くべき報告をやったからである。それは一九五三年の秋のことで、ルッペルトがスカリーに言ったと、スカリー夫人が証言している次の言葉だ。

「これは内緒ですがね——空飛ぶ円盤に関してこれまで出版されたあらゆる書物の中で、あなたの本は最も頭の痛いものです。真実に最も近いからです」

(だが後にルッペルトは米政府筋の圧力を受けて、彼自身の著書の数章を書き直させられた上で新版を発行した。全体の趣旨も削除されている)

(訳者注=フランク・スカリーの著書『空飛ぶ円盤の背後』はむかしからわが国のUFO研究界でも書名はよく知られていた。訳者もこの古典的書物のコピーを所有し、本誌の古い号に数章の訳文を連載したことがある。アメリカの砂漠地帯に墜落した円盤の中に小人宇宙人の死体(複数)が発見されて、米空軍が隠したという驚くべき暴露記事である。

しかしこの書はアダムスキーの著書と同様、猛烈な批判のもとに葬り去られてしまった。だが後に訳者がアメリカで聞いたところによると、アダムスキーはスカリーの著書の内容を「真実だったが米空軍の圧力により抹殺されたのだ」と言ったという。

あれから三十数年が経過して、今アメリカのトップクラス科学者が、円盤墜落と小人宇宙人死体発見事件を事実だと証言したことは、きわめて興味深い。「真実はいつか明るみに出る」の感を深くするのみである。

スカリーやアダムスキーが不死鳥のようによみがえる日は遠くないだろう。時代はその方向に進んでいる。

巨大な火の玉はUFOだったか？

昨年（昭和六十年）十月八日の夜、巨大な光体が日本列島上空をかすめて大騒ぎになった。これはテレビ、新聞等で大々的に報道されたので、読者もご記憶であろう。「飛行機の炎上か」「いや、赤いUFOだ」。各地の警察や消防署、気象台に問い合わせが殺到した。

火の玉は見かけ上ピンポン玉大からテニスボール大で、中には数十センチもの尾を引いたのもあった。

東京都内でも赤く燃えた物体が観察され、UFOではないかという通報が午後八時頃から110番に通報が入り始め、午後九時すぎまでに二十九件を数えたという。

ところがこの火の玉の目撃は静岡県内が多く、同県警に約五十件、静岡地方気象台にも約三十件寄せられた。

航空自衛隊浜松北基地の一空曹は、同日午後、七時五十四分、T33練習機で天竜川河口の上空六、七百メートルを飛行中、北から南に飛ぶ光る物体を発見したと基地に報告している。

この火の玉は長崎発大阪行きの全日空一七〇便のパイロットも、同日午後七時五十五分頃、福岡県上空で北から南へ飛ぶのを発見し、さらに北海道釧路発東京行きの東亜国内航空一四〇便も同八時に宮城県上空で火の玉を発見したという。

ところが翌日、米政府があれはソ連の人工衛星の燃える残骸だったと声明を発してケリがついた。大衆はナーンダということで、この事件は忘れ去られてしまった。

しかし、いったい人工衛星の燃える残骸が同じような時刻に、東北地方から九州にかけてほぼ水平に縦断するものだろうか。ここでも米政府の巧妙な〝大本営発表〟に大衆は惑わされたのではあるまいか、という疑問が残るほどに異常な現象だった。

本誌のトップ記事「偉大な惑星から来た兄弟たち」の筆者で日本GAP静岡支部代表・野口敏治氏は、みずから火の玉を目撃した一人で、「あれは到底人工衛星などではない。まさにUFOそのものだった」と語っている。以下同氏の手記を掲げよう。

「私もこの日、外に出たとき偶然にこの光体を目撃した。西の方向を見ると、目の高さ十度から十五度ぐらいのところを北から南に向かって、先の部分が白銀色に輝く見かけ上二十センチぐらいの細長い光体がゆっくりと移動して行った。目撃時間は約十秒。今までにこんなに巨大な物を見たことはない。

この光体は私の家から一キロメートルほど西の安部川上空あたりを飛んだものとばかり思っていたが、翌日の新聞を見ると大阪の甲子園上空を飛んだと知って、またまたびっくりした。静岡では見かけ上二十センチぐらいに見えたのだから、静岡から三百キロ以上離れた大阪上空では、よほど巨大な物に見えたことだろう。

また静岡支部会員・赤池澄夫氏（富士宮市）からも私宛に報告があった。赤池氏の勤めている会社に出入りしている運転手さんが目撃したという。次のとおりである。

『十月八日午後八時頃、会社の勤めが終わり、いつものように清水市の自宅に車で帰る途中、新富士川橋の三分の一ぐらいの所まで来たとき、山の高さほどの位置を光体が南の方へ飛んで行くのをフロントガラスごしに見ました。

それは水平にゆっくりと飛びました。物体の色はオレンジというよりも白色光に近かった。何か窓らしいものが見えました。それは飛行機の窓のように見えましたが翼はありません。大きさは見かけ上五、六センチぐらいあったと思います。このような物体は初めて見ました』

また静岡県内全域にわたる多数の目撃が地元の静岡新聞でも報道された。『帰宅途中、静岡市内で光体を見た焼津市の会社員男性（三十五歳）は、西の空を北から南の海の方に向かって落ちて行った。長さは四十ないし五十センチぐらいでした。頭の部分は白っぽく光っていた巨大なほうき星のように見えた』と驚く。

伊豆半島でも光体は鮮明に確認された。賀茂郡南伊豆の健康学園の事務長男性（五十歳）は、『子供たちと星の観測中、西の空に目の高さ約十度の上空を、赤くて直径六センチほどの光体が、二十センチぐらいの火の粉を出しながら、北から南に向かって水平に飛んで行った。約十秒間だった』と話し、浜松市の男性（三十五歳）は『可美村役場近くを歩いていたとき、銀色に光る物体が頭上を通り過ぎた。音はなく、穂先の部分がダイヤモンドのように輝いていた』という。

このほか伊東、富士、島田、藤枝、掛川、湖西各市など各地で目撃者が続出したと、この事件を報道している。

新聞によると、この光体はソ連が打ち上げたロケットの残骸ということだった。新聞に報道された記事を見ると、南伊豆の事務長さんが目撃されたのは、私の見た光体と同じ物のように思われる。しかし浜松の男性の目撃した銀色に光る物体は頭上を通り過ぎたと言っている。自分の頭上となると浜松の上空ということになり、大阪の甲子園上空を飛んだ光体は別物ということになってくる。

また赤池氏の報告してきた運転手さんの目撃した窓のような物がある光体は何を意味するのであろうか。ロケットの残骸の落下と時を同じくして巨大なUFOが飛んだのだろうか？　真相は謎だ！」

DNAには美しいメロディーがあった！

どんな生物でも子は親に似ているが、この現象を遺伝という。遺伝現象は、子が両親に似るのはもちろん、同じ種類の生物の子は同じ種類の生物として誕生する。つまりカエルの卵からはカエルの子しか生まれないことを意味している。これは親から子へ、その生物に特有な形質が伝えられるからで、この形質のうちで遺伝するものを特に遺伝形質という。頭の毛や目の色、血液型、音楽などの芸術に関する才能などは遺伝形質である。一方、先祖から受けついだものではなく、生まれてから後に得た形質を獲得形質という。

この遺伝形質を発現させる元になるものは、細胞の核の中の染色体に含まれているDNA（デオキシリボ核酸）という物質である。これは二～九ミクロンの微粒子となって染色体上に規則正しく並んでいる。そして細胞分裂のときは一つ一つのDNAが同じ物に二つずつ複製されて、一つずつが二分する染色体と行動を共にして細胞から細胞へ伝わって親の性質を伝えるので遺伝子と呼ばれるのである。

さて、この遺伝子に実は美しい音楽が秘められていたことを発見した日本人科学者がいる。米シティー・オヴ・ホープ医学研究所特別研究員の大野乾博士（五十七歳）が、DNAの塩基配列を音符に置き換えて作曲したところ、神秘的で、しかも耳に心地よいメロディーの流れる作品が生まれたと静岡新聞昭和六十年九月二十九日付に報道されている（野口敏治氏報告）。

それによると、大野博士はこのDNA音楽を、九月にストックホルムで開催されたノーベル財団主催学術シンポジウムで発表し、出席者のドギモを抜いたという。

同博士は分子進化論の世界的な権威。「複雑な生物の遺伝情報を担うDNAも、太古の原始的な情報の繰り返しからできている」という持論から、「これは繰り返しの美しさを基本とする作曲の原理と同じだ」と考えて、DNAの音楽化に取り組んだ。

DNAはアデニン(A)、グァニン(G)、チミン(T)、シトシン(C)の四種類の塩基がさまざまの組合せでつながって遺伝情報（青写真）を形づくっている。つまりAGTCの四文字から成る暗号文だ。

今回音楽化したのは免疫グロブリンの一種を作るDNA。まずAを音符のレとミ、Gをファとソ、Tをラとシ、Cをドとレというように、それぞれの音符に翻訳するルールを作った。Aをレとミのどちらに訳すかは、メロディーのよい方を選べるよう、ある程度自由度をもたせた。

さらに、この免疫グロブリンの立体構造のうち重要でない部分は速いテンポで、免疫反応に直接かかわる部分は遅いテンポになるように工夫し、夫人の翠さんとハリウッドのピアニスト、マーティー・ジャバラさんの協力で約三百個の塩基配列を一分半の曲にした。

曲には聴く人を力づけるリズム感があり、BGMなどに使えそうで、将来的には多くのDNAを音楽化し、データベースに記録しておくことも可能だという。

この新発見は米国の現代音楽家からも注目されており、作曲のヒントにしようとする動きがあるという。

これならジェームズ・ラスト・オーケストラあたりが編曲演奏すれば、素晴らしいムード・ミュージックが出来るかもしれない。

「遺伝子は音楽よりもはるかに古い。人間が音楽を聴いて気持ちよく感じるのも、元をただせばDNAに行きつく。今までDNAにメロディーがあるのに気がつかなかっただけだ」と大野博士は話している。

こうなると、あらゆる人間の体内には宇宙的な素晴らしい音楽が秘められていることになり、皮膚の色や性格などで他人を差別することはできなくなってくるだろう。

〈大野乾博士〉 昭和二十四年東京農工大獣医畜産科卒。二十七年渡米、二十八年からシティー・オヴ・ホープ医学研究所に入る。米科学アカデミー会員。米国籍。遺伝子がコピーを作ることで生物が進化したとする遺伝子重複説や、ほ乳類の性決定遺伝子はすべて同じであることを解明した独創的研究で世界的に有名。

DNAの情報を基に作られた曲

●東京月例会における
テレパシー練習の跡をたどって

テレパシー能力は練習で向上する

遠藤昭則

昭和六十年度の東京月例会は久保田先生の企画により毎回出席者全員のテレパシー練習を実施した。一年間を振り返って成果の跡をたどってみよう。

試行錯誤の中で、まず年頭にはどのようにしたらテレパシー能力のレベルが向上するのかということを考えていた。テレパシーの練習というと、一般には天気に影響されるとか、肉体の調子はどういうかかわりがあるとか、その他テレパシー能力の向上とは全く関係のない研究がこれまで数多くなされてきた。したがって向上を目指して取り組まれている研究というのは、ほとんどないというのが現在の日本の、いや世界の情勢である。

なぜ向上を目指したものが行われてこなかったのかと考えるに、まず第一にあげられるのが、そのような能力向上を目的としたカリキュラムが出来ていないということであると思う。系統立てて行っていかなければうまく向上できないものを、テレパシー現象はあるかないかとか、またそうでなくてもテレパシー能力者にただ目をみはるばかりで、その人を実験道具にしているようでは、いつまでたっても万人のテレパシー能力は向上してこないと思う。

幸い私たちはジョージ・アダムスキー氏と久保田八郎先生によって世に出された『テレパシー開発法』という素晴らしい、世界で最高の書物を手にしている。この書物を使い、習熟することによって私たちのテレパシー能力は向上してくるのである。

そこで『テレパシー開発法』をもとにしてカリキュラムを作成する試みをしてみた。しかし毎月月例会で練習を行うたびに、あるいは次のテレパシー練習の内容を考えるときになって、いろいろとアイデアが湧き起こってきて、年頭に作成したカリキュラムとは改良されて、だいぶ違うものになってきた。しかしそれでよかったと思う。げんに全体練習の成果は上がってきているのであるから。

全体練習はやはり久保田先生のご指導によるミラクル・ワードの効果が大である。次のような言葉を練習に先立って先生が一節ずつ唱え、それを全員が瞑目したまま心中で復唱して宇宙的フィーリングを起こすのである。

「私は宇宙の意識と一体である。
私は宇宙の意識体である。
宇宙の力、英知、生命に満ちている」

こうして自分のフィーリングを地球から太陽系へ、銀河系へと拡大するように先生が指導される。そのフィーリング状態のままでテレパシー練習に入るのである。

使用した実験用の材料は、一月＝ゼナーカード、二月＝絵に描いた五種類の生物、三月＝五種類の数字、四月＝ゼナーカード、五月＝五種類の数字、六月＝同、七月＝同、八月＝同、十月＝五種類の色、十一月＝同となっている。これらは約五十センチ角の厚い紙に女子美大出のデザイナー、佐塚崇子さんが描いて制作したもので、これを実験者の私が一枚ずつ自分の方に向けて（被験者には見えないようにして）心中でイメージを描きながら十回送信する。被験者はあらかじめ配布された回答用紙に次々と答を記入し、最後に一問十点として自己採点をするのである。

最初は非復元抽出方式で行ったのと初めてなので関心が高かったせいか、60点三名、50点六名という好成績だった。二月から久保田先生によるミラクル・ワードのフィーリング拡大法が導入され、三月は送信時間が長すぎたのと復元抽出方式にしたため、成績が落ちたが、五月より成績が上昇し、十一月は全体に最高の成績となった。結局、練習を積めばテレパシー能力は向上することが実証されたわけである。

（注＝非復元抽出方式とは一度使用した実験材料をわきに除いておいてふたたび使用しない方法。復元抽出方式は使用した材料をまた元にもどして全体を混ぜ返して何度も使用する。テレパシー練習にはこのほうがよい）

被験者は常時七、八十名の大人数だが、セキばらい一つする人もなく、静粛そのもので、その熱心な態度はさすがGAP会員であると毎回絶賛にあたいする立派なものであった。今年度はさらに充実したテレパシー練習を行うので、ご協力をお願いいたしたい。

次に出席者のなかから感想をよこされた方々のコメントを列挙する。

●清水南「この一年間の練習の結果、テレパシー現象が自分で確認できた」

●池田進「自分の想念のあり方がテレパシックな感知力を左右することがわかってきた」

●吉澤清美「毎月のテレパシー練習は確実に効果がある。先生と一緒にミラクル・ワードをとなえること、遠藤さんの指導のもとに真剣に実践することが大切と思う」

●成嶋浩一「疲れていたりお腹がすいていたり他の物事に日頃熱中していると成績がふるわない。今後はセンス・マインドのコントロールを心がける」

●伊藤佐和子「素晴らしい試みだと思う。自分としては十月が最高の成績だった。あせったりせずに、ゆったりとした気持ちで自分の中に起こってくる印象を見ているとよい結果が出る」

●佐々木八郎「いろいろとわからないことがわかってきたという意味では、記録をとりながらのテレパシー練習は効果的だった。せんさいなフィーリングが必要ということもわかってきた」

質疑応答

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳
（連載第2回）

問21　米政府はUFO問題に関する政府の情報を、いつ発表するでしょうか。

答　おおやけにこのことを予告するのは不可能です。しかし私宛に次のような書簡を書くほどに勇気のある人がすでに存在しているのです。書簡自体がそのことを物語っています。

「ワシントン市　米国国務省発
ジョージ・アダムスキー教授殿

当分の間、本書状を個人的書簡と考えることにし、本省の公式連絡とみなさないようにして下さい。

いま論争の的になっているUFO問題に関して、私はここで省内の一部の職員団にかわってこれをしたためますが、私のグループは政府の政策を遠慮なく批判してきたとつけ加えてもよいでしょう。

また私たちはUFOに関する主要調査機関としての役割を横取りした米空軍の自己欺瞞的な役割をも批判してきました。あなたにはいろいろな体験がありますから、本省が（UFO問題の）独自な調査を行ってきて、多くの健全な結論に達することができたということが早くもおわかりになると思います。これは私たち双方が認めねばならぬことですが、議論の的になっており、広く論争されてきた、あなたご自身の主張（注＝アダムスキーの宇宙的な体験に関する主張）を確証する非常に多くの確実な証拠を本省が集めてきたことを知られれば、間違いなくあなたは喜ばれるでしょう。

たしかに本省はあなたの体験を公式に確証することはできませんが、そのことは、あなたが「アメリカの大衆に知らさねばならない」とまじめに考えておられる事柄に関するあなたの仕事や啓蒙活動を適切に助長すると思います。

ワシントンへ来られましたときは、非公式な話し合いにお立ち寄り下さい。私は二月中の大部分、ワシントンから出かけますが、その月の最後の週までには帰るつもりです。

R・E・ストレイス
文化交流委員会」

この書簡はワシの透かし模様の入った紙に書かれたもので、国務省の公印が押してあります。

ストレイス氏は私が「アメリカの大衆に知らさねばならないとまじめに考えている」事柄を一般に伝えるのを助長しますので、この書簡をここに掲載しました。この書簡のコピーが各国GAPの代表に送られています。

（注＝アダムスキーがこの書簡を発表してから多数の読者が米国務省へ照会したために、狼狽した同省はR・E・ストレイスなる人物と文化交流委員会というグループの存在を否定して騒ぎが大きくなった。これが有名なストレイス書簡事件である。この書簡を専門家が調査したところ、本物であり、文化交流委員会も存在したことが判明したとアダムスキーは述べている）

問22　ブラザーズ（注＝友好的な惑星から来た人々）は地球の人工衛星についてどのように考えていますか。一九五六年十一月六日に、水爆の核弾頭をつけたロケットをソ連が月へ向けて打ち上げましたが、これはブラザーズの宇宙船によって破壊されたのですか。

答　これはでたらめな噂です。宇宙空間へ破壊的なミサイルを打ち上げた国はまだありません。

この質疑応答集の第一分冊（注＝本誌前号に掲載）の原稿を印刷所へ渡した後、私は再度オーソンに会って人工衛星のことを尋ねてみました（注＝オーソンというのはアダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』に出てくる金星人の名）。彼が言うには、最初のスプートニクが大気圏外に出たとたんから、六機ないし二十四機の彼らの宇宙船（UFO）が常時それを注視していたということです（注＝スプートニクというのはソ連が一九五七年十月四日にR7大陸間弾道ミサイルによりバイコヌール宇宙基地から打ち上げた世界最初の人工衛星）。このことは、その人工衛星に数個の〝砲弾型物体〟がつきまとって飛んでいるのが見られたという矛盾する報告が正しいことを裏づけています。スプートニク2号も同じく密接な観察を受けました。

ときどき彼らの宇宙船（UFO）の一つが人工衛星に接近しすぎて、そのフォース・フィールドにより人工衛星にわずかな影響を与えるために、別な惑星が人工衛星の正常な運動に干渉するのだといわれています。この説明はバカげていますが、理解していない人々が信じています。

その人工衛星は他の惑星よりも地球に近い軌道を飛んでいましたから、もし惑星が人工衛星に影響を与えるとすれば、その惑星は地球であるはずです。地球とそれに最も近い惑星の間の莫大な距離を思い起こして、人工衛星の軌道の高さと比較してごらんなさい。

私が聞いたところでは、地球人の究極の目標もまた宇宙を旅行することにあり、その目標に向かって科学的な努力がなされているにすぎないことが綿密な観察でわかったということです。宇宙空間へ送り出される人工衛星の目的がこの状態を続ける限り、別な惑星の人々からの干渉はないでしょう。彼ら異星人ももとはこんなふうにして惑星間旅行の方法を学んだのです。

しかし、もしどこかの国が破壊的なミサイルを宇宙空間へ送り出すならば、それは（異星人によって）没収されて、その目的を達成することは許されない

でしょう。地球のどこかの国がこんなことをやった例はまだないとオーソンは言っています。核廃棄物の捨て場所として月を使用することも許されないだろうとオーソンはつけ加えました。

二番目の人工衛星の小さな犬に関しては（注＝スプートニク2号には実験用にライカ犬を乗せた）、地球人のレベルは、この種の実験用に何かの生物を用いないですませるような段階をまだ通過していないと聞いています。あらゆる国が科学研究用に動物を用いています。私たちはこの習慣を嘆き悲しむこともある一方、最初の実験で人間の生命を犠牲にするよりはよいと一般で認められています。その犬は人類を助けるために生命を投げ出したのだとオーソンは言いました。たしかに私たちが戦争における残酷な殺戮によって達成するよりも、小動物のほうがはるかに立派な奉仕をやっています。

またオーソンは次のように言っています。五年ほど前に私がコリアーズ誌へ送った記事の中で、私を通じて（異星人から）与えられた情報にアメリカの科学者たちが注目したならば――これは宇宙ステーションと建設に関心のある一人の一流の科学者の個人的要求にこたえて提出したものです――、地球人はとっくの昔に宇宙空間へ進出できたはずだというのです。

しかしあの記事は手紙を添えて返送されてきました。出版社には科学者のスタッフがおり、それらが私が与えた情報に同意しないと述べてありました。

問23　私はどうすれば異星人に会えて彼らの宇宙船（注＝円盤や母船など）に乗ることができますか。

答　正直に言って私はこの質問に答えることはできません。また、私と同じような体験をしたほかの人でも答えられないと思います。私はだれにたいしても個人的な会見の手引きをすることはできないのです。私自身にたいしてさえできません！　私が彼らに会わされるのは、ブラザーズ側が都合のよい時と場所を選んで行われるのです。

彼ら自身が自分の正体を明らかにすることは常に彼らにかかっています。しかし各国でコンタクトが行われてきましたし、各国の指導者とも行われてきたと聞いています。彼らの去来は官界では秘密事ではありません。このことは『宇宙からの訪問者』で報告されています。

しかも多数の地球人が相手の正体に気づかないで異星人に会ったり一緒に仕事をしたりしているというのは、一般で知られていない事実です。彼らにとって何か有利なことが完全にそなわっていない限り、自分の正体を洩らすことはしません。多くの国が旅行で実施しているわずらわしい手続きなどを考えれば、正体を洩らすと危険なことになるでしょう。

だからこそ、自分たちは別な惑星から来たのだと友人や同僚に自慢する人たちについては疑うほうがよいのです。こうした人々の圧倒的大多数はペテン師です。これにたいする警告は問16に出ています。

一つだけ断言できることがあります。スペース・ピープル（注＝別な惑星から来た人々）は地球人の個人的好奇心を満足させるために来るのではないという事実です。私が聞いたところでは、現在私たちがなし得る最上の方法は、人間同士が互いにもっと尊敬し合いながら生き始めることにあるということです。このような生き方が世界中で行われるならば、人種間の恐怖や敵意は減少するでしょうし、万人の向上を求めて働ける肥沃な畑を残すことになるでしょう。しかしこの最後的な成功は各個人にかかっています。

科学者のなかにはスペース・ピープルから援助を受けている人がいることを私は知っています。そして彼らが獲得しつつある知識は、すでに知られていたり、教科書に書かれていたりする事柄を超越していることを多くの人が認めています。今もなお多くの知識情報が与えられないで保留されているかもしれません。問20の回答を参照して下さい。

スペース・ピープルが宇宙船の推進動力に用いている自然のエネルギーの充分な理解が安心して地球人に与えられるようになるまでに、私たちは生長を求めてやらねばならぬことが沢山あります。この同じエネルギーは人類の進歩に応用されるのと同じほど容易に恐ろしい破壊にも悪用できるからです。

私たちは皮膚の色や社会的地位のいかんにかかわらず、同胞を尊敬しながら謙虚に生きることを学ぶ必要があります。しかしこれは各人、各国家が個々に解決しなければならぬ問題です。

問24　一九五七年十一月上旬に多数のUFO目撃ブームが発生した理由をご存知ですか。

答　ブラザーズによりますと、この数年間に目撃されたUFOのすべては、ソ連の人工衛星打上げの試みにすぎなかったと、ある政府（複数）が公式声明を出す計画があったということです。これは明らかにUFOの実在を疑わせようとする別な試みにすぎなかったのでしょうが、このことは、いぶかる大衆の心に疑惑を生じさせたでしょう。そこで二十四時間以内に六千機の宇宙船（UFO）が投入されて、人々が容易に目撃できるように地球各国上空を低く飛んだのです。

当時宇宙空間に二個のスプートニクが軌道に乗っていましたが、全世界上空であのようなショーを演じることはどこの国にも不可能でした。その結果、各政府は報告を公表しなかったのです。

この大UFO群の出現は二つの目的に役立っています。いままで多くの人が、「この種の出来事が発生すれば、各

国の人々が頭上を飛ぶUFOを同時に見るので、地球の大気圏内を進行する別な惑星の宇宙船の実在について疑問の余地はなくなるだろう」と言っていました。したがって大挙して出現したことはこの要求に応じたことにもなります。以上はプラザーズによって私に与えられた説明です。

あのとき無数の人が宇宙船(UFO)を見たという証言が世界各地から私宛に届いています。あの出現中に、テキサス州のハイウェーで何台かの車が停止したという報道を覚えていますか。この現象はテキサスだけでなく、私はアメリカの他の場所からも多くの同様な報告を受け取っていますが、報道はされませんでした。その当時、円盤の着陸や個人的コンタクトなどが行われました。こうした事件のなかには報告されたのもありますが、私の知る限りでは一般に報道されていません。

問25 スペース・ピープルは私たちを救いに来るのですか(注=これは特定の人々だけを救出するかの意)。

答 ちがいます! 人々のなかには、スペース・ピープルは核戦争の場合や大災害発生時などに〝少数の選ばれた人〟を救うために来るのだという誤った考えを持っているのがありますが、これは完全な間違いです。大災害発生時にスペース・ピープルが近くにいれば、可能なら救出に全力を尽くすかもしれませんが、彼らは実際には、地球人がみずから作り出してその中に自分自身をおいてしまった状態から救い出すために来るのではありません。各惑星、各個人は自分自身の諸問題を解決することによって、自分の宿命を果たさねばならないのです。

同胞愛の法則がはるかな大昔から私たちに伝えられてきました。プラザーズはこの法則を生かしています。したがって彼らがどこかの諸民族を救うならば、ただの〝少数の選ばれた人〟ではなくなります。それは手の届く範囲内の万人ということになるでしょう。彼らは差別をしないはずです。彼らは地球人の人種的宗教的区別をしないことを覚えておいて下さい。

問26 スペース・ピープルはこれまでに何らかの方法で地球人を援助したことがありますか。

答 あります。彼らは私たちがほとんど気づかない多くの方法で地球人を援助してきました。少しだけ話しましょう。

近年世界を苦しめてきた小さな争いのいずれも、もしスペース・ピープルの努力がなかったら、世界的な破壊戦争に発展したかもしれません。また、あれほど長く続いた冷戦にしても、彼らがあちこちでいろいろな方法で干渉しなかったら、大戦争になったでしょう。

しかも彼らは地球の核爆発実験によって大気圏内に生じた放射性諸条件をだめにするように多大の努力を払ってきたのです。これに関する彼らの援助がなかったならば、現在よりももっと多くの放射能が広がるでしょう。時がたつにつれて大衆は彼らが援助している他の多くの方法にも気づくようになるでしょう。

問27 ときどき爆発に伴う緑の火球の正体は何ですか。

答 火球は新しいものではありません。それは自然界と同じほどに古い現象です。なぜならそれは電気的な嵐の最中かその後にしばしば見られる自然現象であるからです。それは実際には電気エネルギーの集中状態であり、しかも一つの自然力として惑星上の生命維持に役立っています。

しかし地球の核爆発実験の結果、大気圏内に誤った危険な状態が生じています。ときとして通常は目に見えないこの放射能の集中状態が集結して、ある条件のもとに大気から充分な元素を引き出して、〝火球〟のように見せかけることがあります。

すぐれた装置を持つスペース・ピープルは、このニセ火球すなわち放射能のポケット——目に見えることも見えないこともありますが——を検知することができます。その場合、彼らはこれをとらえて高周波放射線で破壊します。これは彼らが地球人を援助する別な方法の一つにすぎません。

自然または人工の火球のいずれの場合でも、エネルギーの集中が中心にむかって激烈になりすぎると、自然発生的な燃焼に似た爆発が生じます。このことは近くにジェット機が飛んでいないのにソニック・ブームが記録される理由を説明しています(注=ソニック・ブームは飛行体が音速の壁を突破するときに発生する大きな衝撃波音)。

こうした火球は種々の異なる色で見えたと報告されていますが、最もよく見られるのは緑色です。しかし宇宙船(UFO)も飛び方やスピードによっては、ときとして火球によく似ることがあり、緑、赤、オレンジ、白などに光りますが、そのためによく火球と間違えられます。

問28 地球の飛行機のなかには消滅するのがありますが、この理由が説明できますか。

答 核爆発の後にわき起こる原子雲がどんなふうに見えるかはだれも知っています。あの雲は実際にはエネルギーの集中したかたまりです。これが世界中を流れて行くにつれて、爆発によって拾いあげられたチリを落としながらそれ自体が不可視な状態に変質します。そして限りなくこの状態を続けるのです。

この雲は前の質問で言及した〝ニセ火球〟と同じ集中したエネルギーから成っています。ただスケールが大きいだけです。以前に述べた現象に比較すると、この集中は巨大なものです。多

くの飛行機が消滅する原因となっているのは、このような〝雲〟なのです。というのは、それが最初に放出されたときよりも高度に集中し活性化されたエネルギーの状態になっているからです。目に見えないために、パイロットはその存在に気づきません。

地球の飛行機の一機がこのような不可視の〝雲〟に接触すると、爆発か分解を起こし、目撃者の眼前で消滅したように見えます。これがいままでに報告された飛行機の謎の消滅の理由を説明しています。

数度の機会に宇宙船（UFO）がレーダーに追跡されたことがあり、ある場合には消えた飛行機の近くにUFOがいたという目撃報告さえなされたために、UFOが飛行機を誘拐したのだと言われていました。

しかし私が聞いたところによりますと、地球人の非能率な検知装置のために、パイロットたちはこの〝雲〟の進路がわからないのだということです。この悲劇を避けるために、スペース・ピープルはなるべく急速に集中したエネルギーのかたまりへ手を伸ばそうと最大の努力を払っています。

しかし一機またはそれ以上の飛行機が集中エネルギーのポケットに突入したとたんに、スペース・ピープルが到着した例が何度かあったのです。この状況下では彼らも傍観する以外に方法はありません。なぜなら一度飛行機がこのエネルギーの中へとらえられると、飛行機も乗員も救うことはできないのです。しかし彼らはあとで不可視の雲を分解して、それ以上の破局の発生を避けています。

問29　なぜ天文学者は、近隣の惑星群の大気条件は私たちに似た人間の住むことができないようなものだと言うのですか。

答　まず第一に、実際に別な惑星へ旅行して、そこの大気が地球のものに似ているかどうかを知った天文学者は存在しないことを私は知っています。したがって彼らが確証できるはずはありません。学説上ではできるでしょうが、科学の開発が進歩するにつれて、多くの学説が誤っていることを証明する諸事実により学説も絶えず入れかわっています。

たとえば、さほど遠くない昔、天文学者は地球は四角で平たいという前提から研究し、太陽系には七つの惑星しかないといわれていました。しかし科学が進歩し、優秀な装置が開発されるにつれて、地球人は他の惑星群をつきとめましたし、世界一周旅行で世界が丸いことを証明しました。

分光器は一定の距離以内ならばうまく作動しますが、惑星間で有効に作動すると確信できるでしょうか。これは私の信じていることですが、現在地球人が持っている装置で、別な惑星を直接に取り巻いている諸状態を正確に読み取ることのできる装置はありません。

宇宙空間の諸状態の研究は、大きな水のかたまりを通してカメラで遠方の物体を撮影するのに比較できます。宇宙はエネルギーの波と絶えず変化する〝宇宙のチリ〟を持つ広大な〝海洋〟にたとえられるからです。

問30　月には空気がありますか。

答　あります。形ある物がその形を保つためには、内側と外側の圧力が等しくなければならないことを科学者は知っています。宇宙の天体を取り巻く大気は、爆発や崩壊を防ぐために必要な圧力を提供しています。あらゆる惑星の内部には莫大な圧力が作り出されていますが、外側を取り巻く大気が外からの圧力の完全なバランスを保ちながら内部の圧力を相殺しています。

月は小さな天体なので、比較的薄い大気を持っています。しかし地球人や別な惑星の人間が体を慣らすことができないほどに薄くはありません。最近私たちは月の表面に人工の橋、トンネル、宇宙船の基地などを観測したではありませんか。

しかも、もしアメリカの科学者や政府関係者が、大気が月を取り巻いていることを確信しなかったとすれば、彼らはあれほど多くの金や時間をかけて月に到着しようという努力をしなかったでしょう。月に着陸する人が快適に生活をするために、宇宙船に充分な酸素を積み込んで運ぶのは不可能なことは、読者や私が知っているように、彼らも知っているのです。

それで彼らも言っているように、月に到着する最初の国が地球人の運命を左右するとすれば、運営が遂行できるような基本的諸設備の建設を可能にするには、充分な自然の大気に頼らざるを得なくなるでしょう。また酸素は人間の呼吸に必要なばかりでなく、あらゆる設備の運営にも必要です。モーターも酸素がなければ作動することはできません。

もう一度言いますと、月には平和に幸せに暮らしている人々がいるのです。もしどこかの国が月に到達して着陸しようとするのならば、その計画は訪問先の人々にたいする平和と友好を含んでいなければなりません。

問31　火星と木星のあいだにあるアステロイド帯は、ある人々が信じているように一惑星の爆発によって出来たものですか。

答　ちがいます。アステロイド帯は爆発した惑星ではないとスペース・ピープルが私に語りました。また、ときどき述べられてきたように、それは〝悪の力〟によって破壊されたものでもないということです。

むしろそれは自然の孵卵器であって、自然の法則に従ってその内部で惑星が誕生し、惑星が次第に崩壊するにつれて古い世界と入れかわるのです。太陽系の完全なバランスをとるのに必要な

他の天体群もアステロイド帯の内部で創造されます。

このアステロイド帯はバイブレーターまたは攪拌器の目的を果たして、いわゆる〝停帯した〟エネルギーを生きた力に変えるのです。これはあらゆる太陽系にとって基本的なものです。というのはアステロイド帯は実際には電磁気的にチャージされているからです。各微小な分子はその特殊な範囲内に含まれる自然エネルギーによって個性が与えられ、啓発されます。そして常に変化する関係において成長し崩壊します。高められた活動力を持つこのアステロイド帯がなかったら――しかももっと外側にはさらに二つのアステロイド帯があるのですが――私たちの太陽系はその存在を維持するのに必要な力を持つことにならないでしょう。

もっと明確に理解するには、このアステロイド帯をいわゆるモーターのアーマチュアにたとえるとよいでしょう。しかしこのようにして生じた自然エネルギーにはアンペア数がありません。そしてある程度ブースターとして太陽系に役立っています。

アステロイド帯中の微粒子は絶えず衝突しています。ときとしてこれは二個の混合を生じ、より大きなかたまりになります。ときには爆発を起こしますが、これは二本の熱い電線の交差によく似ています。無数の似たようなアステロイド帯が宇宙全体に存在していますが、すべてはエネルギーの促進物としてばかりでなく、エネルギー発生器または攪拌器として役立っています。それ自体の内部であらゆる天体を支えているエネルギーを生じさせる必要な反応が、この絶えまのない摩擦を通じて起こってきます。

人によってはこのことは神の計画における闘争のように見えるかもしれませんが、これは私たちが知っているような相手を破壊しようとする闘争ではありません。実際にはこれは建設であって、子供を創造する活動で男と女が抱き合って行う闘争にたとえられます。それは一つの面が他の面にみずからを貸し与えて全体の共通の利益を得ようとする秩序ある闘争です。

以上がアステロイド帯の目的に関してスペース・ピープルが私に与えた説明です。私は、万人が住む宇宙のより大きな理解を求める人々の心にひそむ謎を明らかにしようとしてこのことをお伝えするものです。

地球人が宇宙船を建造して宇宙を旅するにつれて、自分自身の体験によってこの知識をすでに得ていた人々から私たちに与えられた、右に述べた真相やその他の知識を、私たちは体験によって学ぶでしょう。

一方、アステロイド帯の起源については、米科学者の一人、アーサー・M・ハーディング博士を引用しましょう。一九三五年にガーデン・シティー出版社から刊行された彼の著書『天文学―地球にもたらされた天空の壮大さ』の一二九頁に、ハーディング博士は次のように書いています。

「小惑星群は、かつて火星と木星の軌道のあいだで太陽を回っていた一個の惑星の爆発から生じたと考えられていた。しかしそれらの軌道の研究から、それらは単一の爆発の結果生じたものではあり得ないことが示されている」

彼の小惑星群の論述は短いものですが、きわめて興味深く啓蒙的です。

問32 たびたび論議された〝地球の傾き〟は完全な破壊を意味しますか。

答 いいえ。実際には惑星の小部分だけが直接の影響を受けるでしょう。地球の一流の科学者連がこの動きを密接に研究していますから、充分な危険警告が与えられるでしょう。

この傾きは地球の巨大な爆弾の爆発の結果ではありませんし、〝世界の罪業〟にたいする罰でもありません。それはあらゆる惑星に発生する自然の秩序ある変化です。

自然は絶えまのない運動をし、常に変化していますが、人間が変えることのできない一定のタイム・サイクルに忠実に従っています。したがって休息していた肥沃な土地を海底から持ち上げて、くたびれた土地と入れ替えさせる地球の傾きは、宇宙のタイム・スケジュールの遂行にすぎません。使い果たされた土地にたいするこの〝休息期間〟がなかったら、惑星は生命を維持し続けることはできないでしょう。遠い昔のサイクルで人間の使用から引っ込められた一部の土地は姿を現すでしょう。

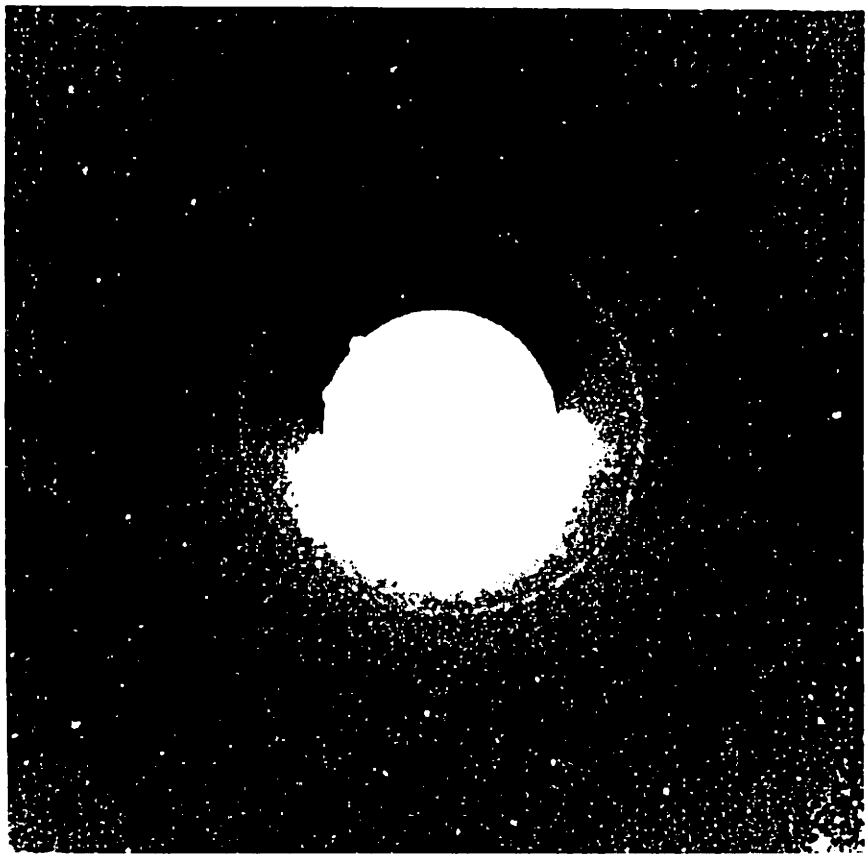
一方、他の土地は再生させるために生命を与える海で覆われるでしょう。そしていつかはるかな未来のサイクルで人間が使用するために再度浮上するでしょう。

以上のことは過去無数に発生しましたので、私たちの〝世界〟は破壊されることになっていないことがわかるはずです。

以上述べたことからして――そこではブラザーズの有利な立場によってより大きな全体的観察力が与えられるのですが――、そして彼らの科学技術的知識と、地球よりもうんと進歩した装置によって、ブラザーズも観測しているのです。発見事が確実になれば彼らは喜んでそれを私たちに伝えてくれるでしょう。これが私たちにたいしてどの程度意義をもつかは、その時が来たときに私たちがどの程度受容的であるかにかかっています。

過去によくあったように、地球の科学者やブラザーズからの警告が無視されるならば、大きな生命の代償があるでしょう。しかし、人々が再建し得る生活力をもって警告に留意し、大切にしている所有物を再度集めさえすれば、生命の代償は最少限にとどまるでしょ

●初めて姿を見せた天王星



天王星（太陽系で内側から七番目の惑星）を目指して飛行中の米惑星探査機「ボイジャー2号」が六十年十一月二十八日、鮮明な姿を初めて撮影した。米ジェット推進研究所がコンピューター処理したこの写真は、九本あるリングの内、一番外側にある「イプシロン」を見事にキャッチしている。なおボイジャー2号は天王星に大気が存在することをつきとめた（共同提供）。

う。しかし生き残るということは、より安全な場所に向かって離れよという警告を重視することにかかっています。またもここには個人的な問題が残ります。すなわち、各人の決定は自分でなさねばならないということなのです。

問33 心霊主義または霊媒として通常知られているものを、あなたは支持しますか。

答 私はいかなる探究の分野またはいかなる形の人間の能力の開発努力をも非難しません。誤った研究の推進からさえも究極的には真理が出てくることもあるからです。法則の誤用は通常無知によってもたらされます。

だれにも所有できて、だれもが楽しめる〝真実の法則〟と、個人のエゴを美化するいわゆる〝もろもろの法則〟とのあいだには大変な相違があります。神すなわち創造主は一個人だけを尊重するのではなく、また神の創造になる大自然界も一個人だけを尊重はしません。

心霊問題の研究は、まず人間の自我、人間と宇宙との関係、人間が扱っている諸要素などにたいする徹底的な知識を得ないことには危険な遊びになります。なぜならこうした基本的な準備がないために、人間を研究する人は多くの大通りを行って結局混乱してしまったからです。真の発達に〝近道〟はありません。しかし忍耐力をもって研究するならば、やがて人は宇宙的な知識への道を得ることができます。誤って理解され実行されている心霊主義や神秘主義は人を当惑させて、しばしば危険におとしいれるだけです。

問34 ウィジャボードや自動書記によって受信されるメッセージについて、あなたのご意見はどうですか（注＝ウィジャボードは霊界通信に使用される文字板。自動書記とは心霊的なトランス状態（失神状態）またはそれに近い状態で、ひとりでに手が動いて文字や絵を書く現象）。

答 再度言いますが、これも人間の自我と万物との関係にたいする理解の欠乏にさかのぼります。自己催眠状態になると、本人は第一レベルの印象類に同調しますが、これは地球上の住民そのものから来る印象です。

この世界には四十五億の人間がいますから、右のようにして得られる第一印象レベルは代表的な〝メッセージ〟を生み出します。すなわち貪欲（どんよく）、恐怖、憎悪（ぞうお）、差別、自己拡張、予測などの想念波動です。そしてこれらは常に低次元な悪ふざけ屋です。

一方、創造主のメッセージは人間をおびやかさず、非難せず、恐怖を生じさせません。このメッセージは個人的な予言を含みません。以上のルールを尺度として用いれば、受信内容がこの世界の低次元から来るのか、それとも宇宙的な性質のものかがかなり容易にわかります。

（以下次号）

地球の哲学と宇宙哲学の相違〈完〉

●西洋哲学の考え及ばぬ〝万物一体〟のアダムスキー哲学

松原眞弓

(5)意識と自由　「意識は無を世界にもたらすものとして自由である」とサルトルは主張しています。彼は「自由は意識の事実性だ」と言っています。事実性とは、偶然的な必然性、たまたま、そうなるべき法則があり、事実そうなっているというのです。彼は「意識は自由であるべく呪われている」とも言っています。意識としては自由でなくなる自由はないというわけです。ここから、「意識は自由を一つの運命として目的とすべきだ」との彼の倫理が出てきます。

(6)死　「死は常に、他人の死、あるいは他人にとっての死であり、未来のないこととして現れる」というのがサルトルの哲学です。「私にとって私の死は発見できない」というのです。彼にとって、存在も、意識の実存も、死も超現象的な存在として不条理なものです。死は偶然性、かつ根元的事実だということです。

「意識は死を覚悟することはできても、意識の存在構造に死はあり得ない」と彼は言っています。つまり、「意識にとって死は実現できない」というわけです。「死は生の内になく、可能性の限界外のことだから」と。これはちょうど他者（他人の意識）が、実現できないもの、自己の限界の外にある自由として、偶然の事実だとサルトルが主張しているのと同様です。

宇宙哲学とはあまりにも異なるサルトルの実存主義哲学

以上が、私がこの地球で見つけ得たもっとも宇宙哲学に肉迫しているサルトルの哲学のおおまかな紹介です。サルトルはもっとも意識を重視し、そこからすべてを取り出そうとした哲学者でありますが、宇宙哲学とはあまりにも反した結論に達しているようです。

それも仕方がないことです。哲学は常にその哲学を生む時代の科学によって支えられているのですから――。サルトルが彼の哲学を形成したのは第二次大戦の終わる以前のことです。その頃、地球の科学は細胞核の遺伝子の構造すら知らなかったのです。

一方、宇宙哲学を生み出した異星の人々は、おそらく何万年も前に現在の地球の科学をしのぐ水準に達しており、その後も断絶することなく、発展してきたのです。G・アダムスキーが土星での会議に出発する時に乗った宇宙船は、物質でありながら意識に転換して、短時間に土星まで旅行できたのです。彼らの科学はそこまで進んでいます。物質を意識に、そして意識を物質に転換するほど科学が進んだとき、物質と意識をまったく別のものとして分離するような思想を、その時代の哲学が生み出すはずはないのです。

しかし、現在の地球はそこまで科学が進んでいないので、意識と物質はまったく分離して考えるしかないものとされています。

サルトルが自己の哲学を語ったのは『存在と無』という著書のなかですが、その終わりに、結論として、彼は重大な考えを語っています。それはサルトルの遺言のように今も響いています。

「意識は自立的な実体ではなく、即自存在によって存在させられているが、なぜ意識は即自存在から出現してくるかが問題である。意識は内的な関係として（第三者によって与えられた関係ではなく）即自と結びついている。ここに意識と即自とは結びついており、この意識――即自の全体こそ、存在とか実在と言われるものではないか。古代のギリシャ人は、即自のすべてをト・パンと名づけ、即自のすべてに無限の空虚がとりかこむものとしての宇宙をト・ホロンと名づけた。われわれは、ト・パンと意識とを分離して二元性で考える方がよいか、それとも、ト・ホロンをこそ、二次元を備えた一存在として扱うべきか……これを考えるのは、今後の仕事であろう」

驚異的な宇宙哲学――万物は一体

宇宙哲学と地球哲学のもっとも違っているところ、われわれ地球人にもっとも受け入れがたい思想は、物質が、その分子、原子の水準で、知性を持ち、しかも意識に支えられて存在するという点にあるようです。

この考えには、存在と意識を一体とする考え方が示唆されています。宇宙哲学もこのような考え方が基本にあり、しかも科学によって裏づけられているのではないかと思います。

そうだとすると、宇宙のもっとも基本的な物質のすみずみまで意識が一体となって存在しており、デカルトのように精神、物体、神を分離させることなど、夢にも考えることはできなくなります。

もう一つ、地球哲学と全然異なるところは「意識こそ神である。意識こそ因にして至高の英知である」という宇宙哲学の教えです。地球の哲学は神を常に意識、あるいは精神と対立させてきたのです。

サルトルは「意識が存在すれば神はなく、神があれば意識なし」とまで極言しています。意識が神であるならば、即自存在のうち、意識と神の二項は合体して一つになってしまいます。しかも、あらゆる物質は原子、分子の水準で意識を持ち、意識に支えられているとすると、第三項目で「一つに合体し、意識は神であり、物質である」ことになります。分離はまったくないわけです。すべては神です。すべては意識です。そしてすべては実体なのです。

われわれはあらゆるところで物質にめぐりあいます。それらはすべて意識であり、神であり、至高の英知であり、永遠の絶対者であると宇宙哲学は答えるのです。

▲サルトル

地球科学にとって、これまでもっとも困難であった分離を結合するための努力は、この宇宙哲学によってまったくそのような努力を試みることさえ必要がなくなる結果となります。

また「神が存在するかしないか」を問うことは、そこにある机が存在するかしないかを問うことと同じことになってしまうではありませんか？　机はまさにそこに存在し、意識に支えられており、知性をもった分子の集合体なのです。それは神そのものであり、しかも神がその存在を支え続けているのです。

ついで、意識と即自存在の関係を問うことも、万物が一体化していれば、困難はまったくなくなります。

即自存在はそれが物質である場合は意識に支えられて存在する意識そのものなのです。このとき、その物質と私の意識がなぜ関係を持ち得るかをいぶかる必要はないわけです。なぜなら、私の意識は、その物質、たとえば机であったし、現に机であるし、未来においてもそうあるでしょう。つまり、すでに意識として一体化している私と机とが、私の知覚という仕方で再度、個別化し、関係をもったことになります。私の意識が自己たる机と再び関係を持ち得るのは、すでに関係が存在したのですから当然のことです。

「即自存在は物質だけを示してはいない」との声が聞こえますが、たとえそうだとしても物質以外の存在、たとえばプールでの知人の不在という存在を考えてみてもやはり同じことです。不在の存在もまた即自存在の特殊な場合でしょうが、この不在という即自存在も、知人の身体はまた意識に支えられた物質であり、知人も身体に支えられる意識であり、私の意識がこのプールという場所で支える知人の不在という空虚な存在も私の意識に支えられており、どっちにしても即自存在は実在的にも、観念的にも意識に支えられているのです。われわれは、どこに行っても、どのようにしても、意識、神、物質から逃れようはなく、しかもこれらは一体なのです。「万物は一体」これは宇宙哲学のおそるべき結論なのです。

地球の哲学は、動物はともかくとして植物、細胞、物質（原子、分子）に意識があり、知性があることについて、これまで考えたこともなかったので、宇宙哲学に接すれば当然、さまざまな疑問が否定的な反論となって起こると思われます。そのとき、もっとも疑問となる点は以下の点についてではないでしょうか？

「かりに分子に意識があるとして、その分子が寄り集まった細胞は意識を持つのか？　そしてまた細胞がより集まった人間の意識と、細胞の意識と、分子の意識それぞれの関係はどうなっているのか？」

このような質問は、哲学、科学にまたがった分野でのものと思えます。宇宙哲学はこれに対して必ずしも明確に答えていません。これは今後の地球の科学の進歩に期待してでのことでしょうか？

ただ宇宙哲学は海の水と一滴の雨滴との比喩を使って、この意識間の関係について語っています。また人の死において、意識を量的に量り得るかのようにも語っています。また細胞や分子の意識をテレパシックに読み取ることなども語っていますので、それらをもとに考えるしか方法はありません。細胞間の知識の交換や、情報の伝達、あるいは病気のとき、人体の足の先から細胞が治療のため患部にかけつけることなど、地球の科学ではその最先端でもはっきり知らないような事実の指摘もあります。

国とか集団が個人の多数（意識をそれぞれ持つ）に支えられて、国や集団の意識を持ち、国や集団として知性と意志を持ち、行動しているごとく、人間は個々無数の細胞の意識と親和して、全体的な個有の意識を持っているのだと私は理解しています。細胞も同様に、細胞を構成する無数の分子の意識と知性に親和した、一つの全体で個有な意識を持つのだと考えます。植物、動物、惑星、宇宙と、この規模は広がるので

はないでしょうか？

宇宙哲学の弛緩について書かれている章には「各細胞には無限に放出できる潜在エネルギーの生気がある」と語られています。このエネルギーは細胞核にあり、それをとりかこむ分子が人の緊張とともに、このエネルギーを押さえ込む働きをするが、もし人が緊張をとくならばこの分子による抵抗は少なくなり、高い振動でエネルギーの生気はまわりに透過し始めるとありますから、人の意識と細胞の意識との相互の協力的な動きはちょうど国家と個人のように存在するようです。ただ、ここで人間の個別化された意識が国家と異なるところは、国家は個人によって支えられているが、人間の意識は細胞の意識に支えられているのではなく、両方とも実体といえるところだと思います。

自由と心

宇宙哲学はこれまでの地球の哲学がどうしても越えられなかった数々の困難、難問を万物の一体化によってなんなく越えてしまったという感をわれわれに与えます。

物質が意識に支えられていることは科学の発展によってわれわれ地球の人間にも少しずつ受け入れやすい素地ができあがりつつあるようです。ノーベル賞の湯川博士が提唱した中間子理論などでも、陽子と中性子とが、互いに相手と中間子をやりとりする活動によって核をまとめあげる力となっていることが認められています。このようなこれまで考えられなかった活動が、原子核のなかで無限に続くエネルギーによって続けられていることなどを知ると、宇宙哲学に示されている細胞内の無限に放出できるエネルギーの生気などという地球でいまだ発見されていない理論も受け入れやすいものです。

またアインシュタインの有名な質量とエネルギーが等価だとする理論などは、今一歩で無形で静かな、しかも無限の力をもつ意識の存在を、そして意識に支えられて存在するに至ったといわれる物質についての宇宙哲学を受け入れやすいものにしています。

聖書が語るあのもっとも難解であった教え「初めにまず言葉ありき」が、言葉とは意識を示しているのだとわかったとき、初めてわれわれ地球人にこの謎の教えが氷解し、意識こそ神で、万物を支え、万物に先だつものだったのだと納得できるのですが、しかし、それでもわれわれにはまだ疑問が残ります。意識が神であり、われわれは意識であり、われわれは神であり、すべては神だとしても、どうしてわれわれは不完全なのだという疑問です。デカルトが神を証明したときに問題にした人間の不完全さはやはり残るのです。

宇宙哲学を学ぶと、やはり宇宙哲学でもこの人間の不完全については認めているようです。ただ地球の哲学はこの人間が不完全であることをもって、ただちに人間は神ではないといって神と人間を分離してしまうところが宇宙哲学と大いに違うところです。

「自由意志と力とを与えられて、深い睡眠におちいって死を夢見ている人間」「普通人は個人的自我によって、自己の本質と因の意識の理解にたいして自己を盲目にしている」などと宇宙哲学で語られています。

また意識に二面性があり、感覚器官の意識と宇宙の意識があること、また心にも肉体の心（センス・マインド）と魂の心（ソウル・マインド）のあることが語られています。

心とは意識が物質を動かすための意志内容を投射する大通りであると宇宙哲学は語りますが、心は実体ではないともいっています。心は意識によってその存在を支えられている存在物だということです。

以上の手がかりから、人間の不完全性という観点にたって考えてみますと、感覚器官による知覚をもとに人間が創造する心という領域では、意識に反することが可能なようです。それを宇宙哲学は自由意志とし、そのように夢見る人間の可能性と力を与えられていると語るのです。

このような不完全な死の夢を見ることができるのも、人間の感覚器官がそれぞれ分離しているからだと説明しています。そしてこのような感覚器官の分離した知覚を結果として受けとり、総合する活動の相関者として現れるのが、現れとしてのセンス・マインド（肉体の心）と名づけられる相関者なのです。

この知覚と肉体の心、自由意志のくだりは、サルトルの存在論とまったく平行しているように感じられます。地球の哲学者としてサルトルは意識を実体ではないとし、自由と呼ぶしかない活動と見ております。そして心を反省のときに現れる存在と見、個人的自我についてはむしろ偏見と見なし、人間は自分をだますことができる存在だと見ています。

サルトルの思想は、これらの点で、宇宙哲学と同意できる面が多くありますが、ただ宇宙の意識が無限の英知を持ち、想念の印象で、具体的に知識を人々に語りかけ得る点については悟ってはいないようです。つまりサルトルは、ソウル・マインドの大通りについては気がついていないようです。それは意識の志向性と明証性を重んじるあまり、意識の志向性の場となっている背景の意識をとりあげようとしないからではないかと思います。そこには宇宙の英知の意識的な想念の大通りであるソウル・マインドがあるはずです。これを別な言葉で表現すれば、宇宙哲学が説くところの四つの感覚を重んじ

るあまり、触覚としての意識を忘れているのだということでしょう。

この四つの感覚と触覚の分析は、宇宙哲学がわれわれ地球の哲学に与える大きな特異点だと考えられます。このような感覚器官についての分析は、いわゆる西洋哲学ではほとんど行っていません。わずかに東洋において仏教が五つの感覚を五根と称して説いているのみです。しかし五根のうち触覚が、他の四つの感覚器官とまったく違って、「意識的意識の意識的知覚」として他の四つの感覚と同列にあつかえない根本的な知覚であることの分析は宇宙哲学を知るうえで特に重要だと思います。

「人間は、この四つの分離された感覚、視、聴、味、嗅覚によって、分離の感念を得、それを拡張して個人的エゴを拡大して行く」これが人間が不完全への道をたどる方法であり、可能性だと宇宙哲学は見ているようです。

そして宇宙哲学の人生の知恵では(これを地球の哲学は形而上学と名づけていますが)人生においてこの四つの感覚器官により分離されている結果の世界を通じて、いかに分離を乗り越え、万物一体の意識への道を歩み続けるかが人間の目的だと語っているようです。これこそ、放蕩息子が家に帰る例え話の深い意味であると思います。

また「汝自身を知れ」と説く宇宙哲学の立場も、この汝自身を知ることによって、結果の世界という回り道をとりながら、自身である意識へ、ソウル・マインドへと帰るべき一つの指針を得る重要な方法を示しているのです。

サルトルの哲学でも、意識は、「自己によって、自己の存在が問題であるような存在」と規定されていますが、これも人間が「汝自身を知る」ことがなぜ重要かを示していると考えます。

ここで、人間の不完全さは、自由意志によってセンス・マインドを意識よりも高めるゆがんだ道をたどって違せられていることを宇宙哲学は述べていますが、しかし、そうかといって自由が悪の道だと説いているわけではないことに注意する必要があります。

放蕩息子が家に帰る決意をするのもまた自由なのですから——。

死と再生——不合理な地球の哲学

地球の哲学は今世紀に入って意識を重要視する方向に進み、多くの哲学家が意識から出発して自己の思想を語っています。この意識と死とをどのように考えているかといいますと、各々の哲学者は各々死については微妙に考えが違ってはいますが、死において意識がなくなるという点では、大体、地球の哲学に共通している所だと思われます。これは単に死において肉体から意識が去るというのではなく、死において意識がまったくなくなる、絶対的に消滅してしまうとの常識的な考えをみな受け入れていることを示しています。

サルトルも死について、意識の構造上からは死は意識にとってあり得ないといっていますが、これは意識が永遠であるといっているのではなく、むしろ、死にあっては意識は消滅してしまうから、自己の死を世界の内で経験として意識することはできないと語っているにすぎないのです。これが他人の死はあっても自己の死はないとの立場の意味です。他人の死を私は意識できますが、私の死は、私の意識が消滅している以上、意識できないということです。ここには地球での常識的な死における意識の消滅が受け入れられているのです。

宇宙哲学では、四つの感覚は死によって消滅し、心は消滅することを示しているようですが、意識は永遠であって、死において意識は本人の肉体から去るのみだと考えられています。

地球哲学の意識＝宇宙哲学の心、といった図式がここで考えられるようです。地球哲学の意識と、宇宙哲学の意識は、この死について考えただけでも同じものを示しているのではなく、宇宙哲学の意識はもっと深いものだということがわかります。

『生命の科学』その他の著書によってG・アダムスキーは意識は永遠であり、死によって意識は肉体から去り、瞬時に生まれ変わると語っておりますが、これは宇宙哲学がその進歩した科学に裏づけられたおどろくべき事実を伝えているのだと思います。

地球のわれわれにはこの考えはおどろきですが、よく考えてみると、地球の哲学の語る、死における意識の消滅の方がもっとおどろくべき不条理を示しています。意識という形のないものが、死によって消滅すると主張するのですから——。

地球の科学は現在の進歩によって、今日ではいかなる物質も消滅することはないことを承認しております。原子、分子の水準で、物質は変転し、あるいは一部をエネルギーに変えて、変化するにしても、消滅はしないことを人々は認めています。同じように、意識も消滅はしない事を認めるべきではないでしょうか?

宇宙哲学はこの間の事情を「電球がこわれれば、あかりはつかなくなるが、電気がなくなりはしない。電気が電球に作用しなくなるだけだ」という比喩でもって人間の肉体の死と意識の永遠性について語っているのです。

おわりに

われわれは、ここほんの二〜三百年間の地球哲学の概観を省察して宇宙哲学と比較してみました。

宇宙哲学は現在の地球の科学水準によってかろうじてわれわれに受け入れられる思想といった観があります。あるいは明日の科学の水準に達しなければわれわれはこの思想をよく理解し納得することができないかもしれません。

地球の素粒子論の学者たちのあいだでよく交わされているこんな冒葉があります。

「よほど人をびっくりさせるほど奇抜な考えが含まれていないかぎり、新しい説が真実であったためしがない」

宇宙哲学は確かに最初、われわれを本当にびっくりさせるようなことを述べています。しかしその思想をわれわれの最近の遺産である地球の哲学と比較してみますと、むしろ宇宙哲学の方がずっと受け入れやすい無理のない説だと感じられるのではないでしょうか。いったんそう感じ始めると、地球の哲学は確かにその時代時代にできるだけ人々は努力をしたことはわかりますが、いまだに岩の上で舟を航行させているような無理が見受けられます。

今日、このささやかな試論を終わるにあたって、やはり考えれば考えるほど、G・アダムスキーのあの驚異的な体験は事実であったのだと、この哲学の道からも結論できるのだと感じられます。

宇宙哲学はこの省察にすべてつくされたとはもちろん言えません。それは無限の、くめどもつきない内容をはらんでおり、今後、地球の思想にますます大きく影響していくと思います。地球の多くの人々の考えはここ三十年間ほどで大変、変わったように見受けられますが、このような変化はこれからもずっと続くことでしょう。この変化の基礎には、この宇宙哲学を始めとする、宇宙からの援助が存在したことをわれわれは忘れることはできません。

GAP短信

■昨年九月二十二日に東京銀座ガスホールで開催された日本GAP総会を、都内港区新橋の港区民新聞が取材し、十月十一日付同新聞(発行部数三万部)に写真入りで大きく掲載された。

■長い伝統を誇るイギリスのUFO専門誌『ブライイング・ソーサー・レビュー』一九八五年十月発行号に、日本GAP発行英文版『UFOコンタクティー』第一号に掲載した記事の内、昭和四十九年十月十一日に広島県尾道市の高校生、藤松和彦君撮影のアダムスキー型円盤及び母船の写真と解説記事、昭和五十七年五月九日に北海道旭川市の高校生、津田頼明君撮影のアダムスキー型円盤の写真と解説記事、昭和五十九年九月一日に高松市で発生した円盤降下事件の三件が二頁にわたって転載された。これは世界のUFO研究会にショックを与えたと思われる。

■沖縄支部代表ア全集の宣伝に大活躍

日本GAP沖縄支部代表・新里義雄氏は私費を投じて沖縄の二大新聞『琉球新報』十月十七日付と『沖縄タイムス』十一月七日付に、アダムスキー全集の広告を全三段の大きなスペースで打った。「UFO問題とは何か!」と題する解説記事とアダムスキー撮影の大母船の写真入りの堂々たる内容は氏の格調高い文章と相まって沖縄に大反響を起こし、各地から氏宛に手紙や問合せが殺到したが、その中には浦添市の下地恵子(しもじ)さんのごとく会員になった優秀な人も含まれている。下地さんの家庭では兄弟姉妹がア全集を奪いあうようにして読んでいるという。新里氏はア全集の普及で大活躍を続けている。宣伝活動の詳細なレポートが編者に届いているが、スペースの都合により本号には掲載できなかった。

■昨年八月一日から一週間、静岡支部主催で静岡駅ビル「パルシェ」で開催されたUFO写真展は前号に詳細を掲載したが、このほど会場のアンケート結果が同支部代表・野口氏より出た。それによると入場者総数六千三百名の内、回答者は男五九七人、女四七二人、十代と二十代が全体の八八パーセントを占めており、学生が八〇パーセントに達した。「UFOは存在すると思うか」という質問に対し、「存在する」と答えた人が八二パーセント、またUFOを目撃した人が五人に一人いることも判明。地球以外の惑星に人間が住んでいると信ずる人が七三パーセント、アダムスキーの名を知っていた人が三四パーセント、この種のUFO写真展の企画を期待していた人が八八パーセントもあるという興味深い結果を示している。この野口氏の報告書はコピーにとって今後写真展開催を企画する支部に参考資料として送るので、編者宛申込まれたい。

■松山市で第二回目のUFO写真展

昨年十一月九日より十七日まで愛媛県松山市の丸三書店で松山支部主催のUFO写真展が開催された。一昨年十月に開かれた同地の第一回写真展が大好評を博したため二回目を企画したもので、支部代表・伊藤達夫氏が準備したアダムスキーを主体とする写真約六十点を展示した。当初、寒さと雨の影響で出足が鈍ったが、三日目に地元のNHKがテレビ取材に来て、その日の夕方六時半と夜八時四十五分の二回にわたってローカルニュースで写真展会場風景をテレビで放映したために、

翌日から見学者が大挙して押し寄せた。しかも八時四十五分のニュースではトップで放映し、オーソン肖像写真を最初に流したという。このテレビニュースは四国全域の約四十万ないし五十万の人が見たと推定される。

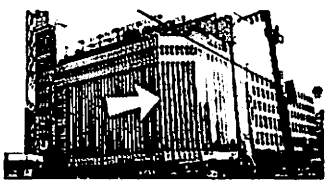
今回は工夫をこらして伊藤氏がスライドを製作し、ナレーション入りで会場で映写して核兵器の危険性を前面に打ち出したことと、侵略者、悪者宇宙人のイメージを払拭して、友好的な偉大な異星人の来訪を認識させるように努力したことが特色となっている。スライドが終わって感動で涙ぐむ少年少女たちもいたと伊藤氏は報告している。

■船橋西武デパートでUFO写真展

暮れも押しつまった昨年十二月二十七日から三日間、東京本部主催で千葉県船橋駅前の西武デパート八階のスタジオFで急拠UFO写真展を開催し、計約六百人の入場者があり、大盛況を呈した。スタジオFは二十帖程度の狭い部屋で、探しにくい位置にあったにもかかわらず、本部役員・遠藤昭則氏の尽力により、朝日、読売、毎日の各千葉版にアダムスキーの円盤写真入りで大きく紹介記事が掲載されたため、連日多数の入場者でにぎわった。特に最終日の二十九日は午後二時から一時間、「世界のUFO問題」と題する久保田会長の迫力ある一般人向け講演が行われたがこのときは超満員となった。千葉県の会員・中里僧彦氏の寄付十万円を資金として企画されたこの写真展は、展示写真を静岡支部より借りて東京本部役員総動員で運営されたもので、あわただしい年末にしては大成功だった。会場使用料は無料、遠来のGAP会員多数の応援もあって、六十年度の最後を飾るにふさわしい終幕となった。

■福岡でもUFO写真展を開催予定

各地の支部によるUFO写真展の大成功に負けじとばかり、本年三月二十日より二十三日までの四日間、福岡支部もUFO写真展開催に踏み切った。会場は福岡市内の目抜通り天神四丁目の天神ショッパーズプラザ五階の書店「りーぶる天神」内に設けられた展示会場「りーぶるプラザ21」。西鉄福岡駅または西鉄天神バスセンターより徒歩五分、地下鉄天神駅より徒歩四分という便利な所で、会場は約二十帖。期間中は本誌とア全集の即売の他、アンケート用紙、入会案内書等の配布を行う。運営役員には支部代表・喜多正宜氏以下十二名という恵まれた人材があたり、支部の総力をあげて取り組む。



▲矢印は会場を示す。

■右の他に今年度は大阪、仙台、新潟の各支部がUFO写真展開催を企画中で、八月には東京本部が千葉市で、静岡支部が静岡市で開催を考慮中。こうしてGAPの〝知らせる運動〟の輪が全国に広がることをスペース・ピープルは望んでおられ、そのため日本GAPに期待をかけておられる様子。いずれは日本GAPの手でUFO写真を海外に持ち出して、外国でUFO写真展を開催してはどうかというアドバイスもスペース・プラザーから頂いているが、経費その他の点で早急には実施できないにしても、雄大な構想として留意し、いつかは実現させたい。

■アダムスキー全集発行元の文久書林は住所と電話番号を次のように変更した。振替番号は従来どおり。

東京都文京区西片一―一九―一〇、西片ハウス二F

☎（〇三）八一三―九五六一

■東京月例会は毎回七、八十名の出席者で大盛況を呈しており、このため午後二時開始、六時終了では全員自己紹介その他が不可能なので、今年二月の月例会より開始時刻を三十分繰り上げて毎月第二土曜日の午後一時三十分開始に変更した。会場は従来どおり上野公園内の東京文化会館四階大会議室。

■東京本部役員の大野世津子さん（東京）は三月に結婚のため役員を辞任するので、後任に佐藤（旧姓・佐々木）智子さんが就任の予定。

■クリフ・プール氏主宰のイギリスGAP機関誌32号は、当方から送った英文版Uコンの内容をトップ記事で掲げて日本GAPの活動を激賞している。ただしイギリス人はア氏問題に関心が薄いため、しばらく休刊するとの由。

投稿欄 Uコン広場

素晴らしかった東京月例会

仙台市　笠原弘可

東京月例会終了後は遅くまでお付き合いいただきありがとうございました。申し訳ありませんでした。その分と言っては変ですが、ますます精神向上に傾注し、GAP活動発展に少しでも貢献したいと考えています。

十二月の東京月例会の雰囲気は非常に素晴らしく、心強い限りでした。仙台から久し振りに参加した太田節子さんも、「素晴らしいので、また行きたい」と感激の電話をよこしました。

引越しで大分身辺がごたつき、支部報作りも遅れてしまいました。また、仕事のほうも少々忙しくなってきましたので楽ではありませんが、出来る限り頑張ります。来年は仙台支部も飛躍の年にしたいものです。「UFO写真展」を是非開催できればと考えています。何卒、変わらぬご指導をお願い致します。

GAPで救われた

名古屋市　佐藤史朗

いつもGAPの機関誌を送って頂いて本当にありがとうございます。もしも久保田会長殿とスペース・ピープルとアダムスキー氏がいなかったら今日の僕はなかったことでしょう。きっと暗黒の世界をさ迷っていたことでしょう。

この前はイエス・キリストのカラー写真を贈って頂いて本当にありがとうございました。僕は死ぬまでに一度はイエス・キリストの顔を見てから死にたいと思っていましたので、本当に大変感謝しています。大切に保存しています（オーソン氏の写真も持っています）。それからお礼はいりませんがもしもとおっしゃるなら僕に一番いいと思われる言葉を与えて下さい。お願いします。僕は今二十七歳ですがいつまでもGAPの機関誌を送って頂きたいです。また機関誌の継続期間が過ぎれば必ず知らせて下さい。よろしくお願い申し上げます。それでは会長殿が長生きされて幸福な人生を歩まれるよう祈っています。

書店卸しに協力を

岡山県　坪井マリ

先日のGAP総会、十月六日の大阪支部大会での素晴らしい御講演をほんとうにありがとうございました。GAP会員になって九年位になりますが、いたって不勉強な会員でして、総会にもはじめて出席させていただいた次第です。

今度の大阪支部のお話は本当に眼のさめる思いがいたしました。先生の全身をふりしぼって出る想念波動が私達の細胞のすみずみまでしみわたってゆく思いがしました。

さて、まだ書店側との交渉はしていないのですが、「Uコン」の書店卸しをさせていただきたくペンを取りました。先生のお話の中の九州の女性会員の方の一件をお聴きして、何だか私もじっとしていられなくなったのです。支部大会から帰って「知らせる運動」に私も参加しなくては、というとても強い衝動が内部から起こったのです。夜半、ぽっかりと眼がさめて、アダムスキー全集をどこかに寄贈しなくては、という衝動が高まったりするのです。この手紙と同時に私の母校の高校へ寄贈したいという申し出の手紙を出そうと思っております。うまく受け入れてくれれば良いのですが。説明書を送って下されば幸いに存じます。

信念の力で奇跡的に海外旅行が実現！

千葉県　堀江健一

素晴らしい旅行（昭和六十年度日本GAP海外研修旅行「エジプト・エルサレム宇宙考古学の旅」）を企画していただいてどうもありがとうございました。エジプトでは日本とは異質な文化に驚き、なによりもピラミッドの大きさには圧倒させられました。イスラエルでは強烈な印象を受けてきました。二千年前この地が選ばれ行われたスペース・プログラムと現在のスペース・プラザーズの方々の活動やGAPが深い関係と意義を持っていることを感じました。感動の連続のイスラエルでしたが、とくにある教会へ入ったとき、他の教会とは全然違う印象を受けました。後でわかったのですが、そこは鶏鳴教会でした。この地はイエスが宇宙の意識を気付かせるために歩かれ、その波動が満ちているところかと思うと、全身が細かく震える感じがずっと続きました。

ところで私はこの旅行に参加するため着々と準備を進めているとき、先生から旅行が十日出発から十三日へ三日ズレたと聞き、たいへんショックを受けました。会社の休みの関係でこれは九九パーセント参加出来ません。しかし私はこの時期にあのイスラエルへ行くことにすでになっているという感じを以前からもっており、「この旅行には参加することになっているんだ！」という信念を持っていました。そしてそれを聞いた翌日、上司から長期出張を命ぜられました。そのあと田中さんから、出発は十二日だと聞きました。なんと驚いたことに、出張先の会社は夏休みが十二日から始まることがわかったのです。いざ出張してみると、その他の条件もうまくそろっていました。まるで目に見えない手に導かれているかのようです。「すでにそうなっているんだ」という信念による結果なのかもしれません。旅行から帰ってからは、万物一体感が以前よりはるかに強く感じられるようになりました。ときたまぐっとわき出るようにくることもあります。この旅行に参加された皆さんや、お世話になった田中氏、そしてこの素晴らしい旅行を企画していただいた久保田先生に感謝いたします。

一日に二十数回もUFOを見る

北海道　山崎泰照

実は今日は久しぶりに驚いたことがあり、さっそくペンをとりました。それは他でもなくUFOを二十数回も見たからです。夕方晴れていたのを八時頃ふと思い出し、星を見ようかなと思って外に出て見上げた時、かなり明るい光が北東から南西へスーッと飛んで行きました。空の三分の二位にわたってスーッと飛んでいったのです。見えなくなるのを確かめると、また初めのと同じ位置に突然現れ、スーッと飛んで行きました。次に同じように現れましたが、これは少し大きく、ちょうどキャッチボールしている時のボール位の大きさでした。そしてもう一回見たので、すぐ近くにいる友達のところへ行ってそのことを話すと、「そんなに現れたのなら、何かメッセージでもあるんじゃないですか」と言ったので少し気になりました。少しして帰ってきて玄関に入る前、九時頃、また空を見上げると、また同じように現れたのです。平均してピンポン玉から野球ボールより少し大きいくらいのが、見た目には飛行機より低い高さで、次から次へと現れたのです。何回めかには、「私の考えがわかるなら、たまには反対に飛んで下さい」とテレパシーを送ると、次の一回だけ、ボール位の大きさでちょうど正反対に飛んできたので「オットー」と驚いてしまいました。結局二十数回数えてやめました。見上げていればいつまでも続きそうな感じでしたから、見ながら、さきほどの友達の話を考えていましたが、はっきりとした印象はありませんでした。終わり頃になって、なんとなく、「我々はあなたがたを鼓舞するために（再び大勢で）やってきたのだ。あなたがたの意識の水準をひきあげるためにやってきたのだ」という感じが軽くしましたが、よくわかりませんでした。しばらくして、こんなに現れて、そのうち一回はこちらの考えにあわせて飛

んでくれたのだから、すぐ知らせた方が良いかなと思いペンをとったのです。その前に、近くの自動販売機へジュースを買いに行って、玄関のところで、もう一回と思って見上げると、また現れました。

ところで今年に入って時々見るようになったのですが、それも数カ月に一回という感じで、それが二カ月前友だちと天体望遠鏡で見ていた時、四回見て、二人して、今日は不思議ですねと話しました。それからは一～二週間おきによく見るようになり、十月十日の日は、玄関前で二～三回見たので、望遠鏡をもって少し離れた山のふもとへ行きましたが、帰ってきて玄関前まで来るとまた何回か見ました。

話はもどりますが、大きめのときは、向こうの方へ行くに従って平べったい感じがわかりました。それから、見た時は静かな感動でしたが、しばらくしてから心の底から、「今日は素晴らしい日だ」という感じが何度も力強くわき起こってきて、窓際が高揚していくようで、反面、奇妙な感じも少ししました。

このごろ時々浮かんでくる印象では、「常に目覚めていなさい！　もっと生き生きと目覚めていなさい！」という感じが一番強いです。

実践の重要さを知る

秋田県　佐藤春雄

先日の総会は大盛会で本当におめでとうございました。先生のお話も最高に素晴らしく、参加させて頂いて本当に良かったと強く思っています。遠藤氏のお話も、アダムスキー哲学以外では真理は絶対に得られないのではと思われるほど重要な事が含まれていたように思います。先生のお陰様で私は今最高に幸運な人生を歩けますことを重々お礼申し上げます。災い転じて福となすとは正に私の為にあるように思われます。手の怪我で前途真暗闇の中から救い上げて頂いたように感じています。

今回、本誌90号の印刷ミスも私にとっては災い転じて福となりそうです。なぜかと言えば、この90号を秋田県内の、市とつく所在地の図書館すべてに献本できたからです。八月末までに、十八冊できました。鹿角市だけは花輪とか十和田が合併して鹿角市となったところですので、そこだけは問題が起きないように、花輪と十和田の両図書館へ献本して来ました。

そしたら総会の二週間程前の九月七日に、十和田大湯のある方から手紙が来ました。この方は手紙の内容から私が察するところ、チャーチワードとかデニケンとかで全くアダムスキー氏とは関係のない考え方のようですが、とにかく私はその方へ返事を差し上げようと思い、何か良い資料なるものはないかと探していて、アダムスキー氏のある論文を読んでいる内自分が他人から頂いても目を通していなかった素晴らしい内容の資料が見つかり、その後アダムスキー論説集の「必要な物は与えられる」を皮切りに次々と目を皿のように読み始めました。ここで私はしっかり気づいて、呆然自失となりました。

先生に今まで数多くの素晴らしいアダムスキー哲学を習っていながら、ただ聞いていたに過ぎず、実践らしき事は何にもやってないのでした。アダムスキー氏も「生命の科学」の中で、「あなたがどんなに素晴らしい哲学、宗教等を習っても、日々の生活にそれを生かさなければ何にもならない」という意味のことを述べられていますが、全く今の私はその通りです。その後前回の秋田支部大会のすぐ後に、その当時、青森に帰っておられた大久保氏に、私がGAPに入った時の本氏64号より以前の主な記事をコピーして送って頂き、特に先生の論文「UFO研究とは人間研究」は本当に素晴らしい論文ですね。これを私は何度も読み返していますが、本当に勇気づけられます。そして昨日は本誌53号の「光の子と闇の子のたたかい」を読ませて頂き、今まで自分の将来の事について、結婚の事について悩み続けて来た事が一度にスーッと消えてしまいました。なぜ今までどうどうめぐりで同じ事をくり返し考えていたのか、何もならないある考えにこだわって来たのか、本当にうそのようです。昨日、自分なりに今後どのようにすれば良いのかの回答が、先生の素晴らしい論文を次々と読んでいる内に私の内部よりわき上がって来ました。結果はやってみない事にはわからないし、今はとにかく私に必要なのは行動力、実行力である事までははっきりわかりました。

多数の過去の本誌に掲載された素晴らしい先生の論文を出来れば一冊の本にしてほしいと思いますが、いかがでしょうか。アダムスキー氏と一体であると思います。

ミラクルワードとイメージ法で素晴らしい毎日を

東京　小島原竹子

私は仕事で外国人に日本語を教えています。気持ちが沈んで元気がないと授業がまずいものになってしまいます。生徒も教師のそのような態度に敏感ですから油断はできません。そのためでしょうか、私は朝、駅に向かって歩いている時（本当は走っている日が多いのですが）一瞬ちょっと緊張します。それは、今日の授業は大丈夫かなという気持ちがあるからです。その心配を消すために、すぐにいつものミラクルワードを唱えます。「今日もすばらしい日である。すべて私の思い通りにいく」というミラクルワードです。まずこれらのミラクルワードを唱えて、気持ちをふるいたたせます。そして街で見かけた人々に対しては、できるだけ祝福の想念を送るようにしています。駅までの時間が約十分。

次に電車に乗ってからは自分を客観視するように努めています。そのために私はまず宇宙空間から地球を眺めている様子をイメージに描きます。そのとき、「私は地球で生きている」というミラクルワードを唱えます。地球のイメージを描くのに助けになっているのが、NASAの月面から地球を撮った写真です。私はその写真がとても好きで、机の前に貼ってあります。その写真を見ていると、私は地球で生きているんだというフィーリングが起こり、悩み事があっても、それを客観視することができ、元気がでてきます。

話を元に戻しますが、電車に乗っているのはたったの五分です。駅に着いてから学校までは電車内での続きをやります。クラスで何か問題があった時は、生徒がニッコリ微笑んでいる姿をイメージに描いて、絶対にうまくいくと念じます。そうすると不思議なことに、問題はすぐ解決されます。

ただ感謝あるのみ

金沢市　北市寛也

あけましておめでとうございます。昨年（一九八五年）七月に発行された本誌90号の「アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法」には最高に感動いたしました。特に28頁の宇宙哲学の実践法ですが、これこそはアダムスキー哲学の真髄であり心髄ともいえるでしょう。

ああ、もし私の現世にアダムスキーという方がいなかったら（昭和四十年春までにはいた）、それに久保田八郎先生という方がこの日本に存在していなかったら、私は今頃自殺していたかもしれません。アダムスキー氏や久保田先生には感謝しても感謝しても感謝しきれません。それほどに心から深く感謝しております。

Uコンも号数を重ねるごとに毎号毎号が本当に楽しみで待ちきれません。これからもますます充実したUコンになることを期待しています。

それから私は人間の生き方ということに非常に強い関心があります。それは久保田先生もきっと同じだろうと思いますので、これからもそういう記事をどしどしUコンに載せて下さい。たしか久保田先生の持論として、UFO研究は人間研究ということがあったと思います。僕はアダムスキー哲学実践をライフワークにして行おうと思っています。どうぞ久保田先生、風邪などひかれないように、邁進して下さい。

第8回山形合同支部大会

●十月二十日(日)
●米沢市　置賜総合文化センター
●出席者　三十四名

紅葉のあざやかな秋たけなわの頃、米沢で久保田先生をお迎えし、東北地方の方々を中心に四国、中部の遠方からの参加者を得て大会が盛況裡に開催された。

柴田文子さんの女性らしい優しさにあふれた司会で始まった大会は、久保田先生のご講演で盛り上がった。「アダムスキー哲学の生かし方」と題して、人体の自然治癒力こそ宇宙の意識の現れで、これと一体化することによってテレパシックになると話され、さらに他人を裁くのは自分の価値基準を他人にあてはめることだと説明し、これからのGAP活動の方向を明確にし、コンタクト時代として真実追求を力説された。

夕食会では社交ダンスのプロである上山市の会員・本山恒明氏の見事な踊りが披露され、秋田の民謡の大家、佐藤春雄氏の素晴らしいノド、福引きなどでにぎわったあと、二次会、三次会と深夜まで交歓が続いた。

翌日の観光は快晴にめぐまれて天元台へドライブし、山上で名物のイモ煮会を開き、この地方独特の味を賞味して頂いた。

遠路をはるばる参加された皆様、久保田先生、大会を素晴らしい宇宙的フィーリングに導いて下さった見えないご援助に心から感謝申し上げます。

（清水　正）

夕食会のダンスで清水代表の母堂が本山君と組んで軽妙な素晴らしい演技を披露されたときには、これが六十歳かと驚嘆した。どう見ても二十歳そこらにしか見えない。ものすごく気分の若い方であるという。これこそ異星人的生き方であろう。

（久保田）

第3回福岡支部大会

●十一月十七日(日)
●福岡市　福岡商工会議所
●出席者　二十九名

福岡支部は結成以来三年目、メンバーも定着したので、この際大会も連続三回目を開催した。

今回の大会は少々肌寒い日に行われたが、遠来の方々をまじえて落ち着いた雰囲気で始まった。支部代表の挨拶に続いて川上富喜氏の「祝福と感謝の生活」と題する講演が行われ、アダムスキー哲学と久保田先生との出会いや、特に太陽のイメージ法、ミラクルワード（奇跡を起こす言葉）の素晴らしい実践が報告された。六十歳代の氏の熱意とパワーに感動する。

続いて久保田先生の「コズミック・マンになるためには」が講演され、ここでもミラクルワードとイメージ法の必要性が強調され、またイメージ法を用いた医療機関によるガン治癒の実例が紹介されて、ミラクル法の効果が一般に認められてきた実状を報告された。またGAP活動はコンタクト時代に入っていることや、スペース・ピープルとの接し方が示された。これには意識と意識の交流が必要なこと、単なる好奇心ではだめであること等である。また直接行動を起こす必要性と、意識の世界にのめり込むことを強調された。そのあと質疑応答では熱心な質問が多数出て、真剣な熱気に満ちていた。

夕方は別会場で立食パーティーを行い、互いの出会いを大いに楽しむ。翌日は唐津方面へドライブし、玄海原子力発電所の見学と唐津市内観光を行ったが、玄海灘から吹きつける季節風が強く、首すじをすくめながらもなごやかに西果てのツアーを楽しんで無事博多に帰った。久保田先生と参加された皆様の今後のご活躍をお祈りします。

（喜多正宜）

名古屋支部大会

●十一月二十四日(日)
●名古屋市　愛知会館
●出席者　四十三名

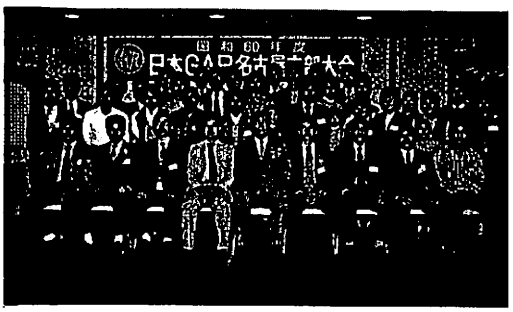
本年度最後のGAP関係行事を飾る名古屋支部大会は、当初の予想をこえた大勢の方が参加され、大盛況裡に行われた。特に大阪支部から多数の応援参加を頂いた。

大会は大山氏の巧みな司会で幕が切って落とされ、久保田八郎先生の講演「宇宙的フィーリングを起こす方法」が始まった。内容はふだんあまり聞られない極めて高次なものであり、特にスペース・プラザーズに関する重大な話のあたりでは、場内の波動が宇宙的な高貴さに満ち溢れているようだった。

具体的な内容として、(1)五十八年、日本GAP企画海外研修旅行で、先生がローマのサン・ピエトロ大寺院でペテロの椅子を探しておられたとき、案内した方が実はスペース・プラザーであったこと。(2)国内においてもGAP静岡支部代表・野口氏の素晴らしいコンタクト体験等が紹介された。

夕食会では三十名の方が出席され、テレパシー実験、福引きありで、秋田県より参加された佐藤氏による本格的な民謡も披露されて楽しいひとときを味わった。

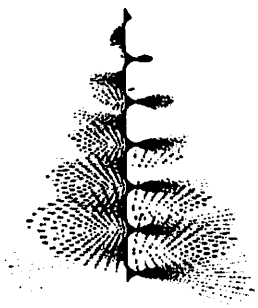
翌日の観光は前日の雨がウソのように晴れ上がり、少々風が強い寒い日となったが、十一名が参加され、予定の人間博物館「リトル・ワールド」を見学。野外には世界各地から集められた復元民族家屋が建てられて園内観覧車で一周、ちょっとした世界旅行の気分を味わった。本館展示場では世界中の豊富な民族資料を見学、各国の人々の生活状態を身近に知って楽しい一日をすごした。多忙中ご出席下さった会員各位と久保田先生に深謝致します。（林　国宜）



〈予告〉61年度地方支部大会〈その1〉

下記以外に本年度は次の各支部大会が企画されています。長野支部大会(5月25日)、東京総会(9月21日)、大阪支部大会(10月12日)、仙台・山形合同支部大会(11月2日)。詳細は次号以下掲載。

	第7回　松山支部大会	第6回　新潟支部大会	第8回　静岡支部大会
日時	3月23日(日) 午後1:00→5:15	4月29日(祭) 午後1:00→5:00	5月4日(日、3連休の中日) 午後1:00→5:00
会場と交通	「ホテル・シャトーテル松山」 9F会議室 ☎0899-46-2111 松山市三番町4丁目9-6 松山市役所横、日本銀行松山支店前。国鉄松山駅下車、駅前から「道後温泉」行市電に乗り「市役所前」下車、徒歩1分(茶色のビル)。松山観光港、松山空港からタクシーで20分、バスで35分。	「ホテル・やまざわ」 3F大広間（和室） ☎0258-32-0106（フロント） 新潟県長岡市殿町2-3-9(国道17号線沿）長岡駅より徒歩5分。駅前通りを直進し、ボン・オーハシのある交差点を左折すると見える白い建物。東京からは上野一長岡間上越新幹線あさひ号で1時間半。60年10月からは関越高速自動車道も開通している。	「静岡ステーションホテル」 8F大ホール ☎0542-81-7300 静岡市南町8。 静岡駅南口前、徒歩1分。東京駅より静岡駅まで新幹線こだま号で1時間半、新大阪駅より2時間半。いずれも途中乗換えなし。
会費	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納、グランドキャビネ判、送料共）	左に同じ	左に同じ
プログラム	司会　野島哲治 1:00　支部代表挨拶　伊藤達夫 1:10　講演「アダムスキー哲学の実践法」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:20　講演「地球に残された異星人の足跡を訪ねて」天中童氏 2:45　休憩、記念撮影 3:20　全員自己紹介、質疑応答 4:50　スライド上映「地球と太陽系のよりよき友好のために」(映写時間18分) 5:15　閉会 ※今回は本誌91号掲載「円盤に乗った日本人少年」の天中童氏が特別講演されます。	司会　足立亘宏 1:00　支部代表挨拶　星 富治夫 1:10　講演「スペース・ピープルは存在する」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:40　全員記念撮影・休憩 3:10　全員自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※質疑応答に際しては当日行われる先生の講演内容に関する質問を最初に用紙に書いてお受けしますので、この機会を有効に活用して下さい。	司会　高梨和明 1:00　支部代表挨拶　野口敏治 1:10　講演「スペース・プログラムの実態」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:25　休憩・全員記念撮影 3:00　自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※今回は久保田先生を囲んで話し合いに徹した家族的雰囲気に満ちた大会にする予定で、珍しい話も出ると思われますから、多数ご出席下さい。
夕食会	大会終了後6:15から8:15まで「全日空ホテル」宴会場で希望者による夕食会を開催。大会会場から全日空ホテルまでは電車通りに沿って徒歩7分。愛媛県庁のすじ向かい。松山三越の隣。 会費¥5000	大会終了後6:30より8:30まで同ホテル2Fの別室にて立食形式の夕食会を開催します。 会費¥3000	大会終了後6:00より8:00まで同じホテルの同じホールにて希望者による夕食会を開催。 会費¥5000
宿舎	「ホテル・シャトーテル松山」をお世話します。 シングル　¥5000（税サ込） ツイン　¥8000（　〃　）	「ホテル・やまざわ」をお世話します。 シングル　¥4800（税サ込） ツイン　¥8000（　〃　）	「静岡ステーションホテル」をお世話します。 シングル　¥4800（税サ込 68室予約済） ツイン　¥9500（税サ込 4室予約済） 和室(2人)¥9500（税サ込 2室予約済）
申込	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで3月10日までに下記へ。 〒794 愛媛県今治市貞金町1丁目4-4、伊藤達夫 ☎0898-22-3060	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで4月27日までに下記へ。 〒946 新潟県北魚沼郡湯之谷村井口新田572番地、星 富治夫 ☎02579-2-5562	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで4月末日までに下記へ。 〒422 静岡市西島304-9、野口敏治 ☎0542-86-7729
観光	大会翌日は希望者で松山市郊外へドライブの予定。マイクロバスを用意します。25名まで可。 朝10:00ホテルを出発、午後3:00頃、港と空港にお送りし、3:30頃シャトーテルで解散。 費用¥1000（昼食代別）	大会の翌日は数千本の吉野桜が咲き乱れる桜の名所・悠久山（ゆうきゅうざん）公園を散策します。時間の余裕があれば眺望の素晴らしい八方台まで足をのばす予定。10時出発。 費用¥1000（昼食代別）	大会翌日は希望者で静岡、清水方面を観光。富士山の見える港〈清水港〉を船で遊覧。4月オープン予定の全国有数規模の静岡美術館を見学。朝10:00ホテル出発、午後4:00静岡駅着、解散。 費用¥3000（昼食代共）
備考	3月は大会のため月例会は中止。	4月の月例会は平常どおり20日(第3日曜)に行います。	5月の月例会は大会のため中止。



日本ＧＡＰ企画第８回海外研修旅行

アメリカ メキシコ 宇宙考古学の旅

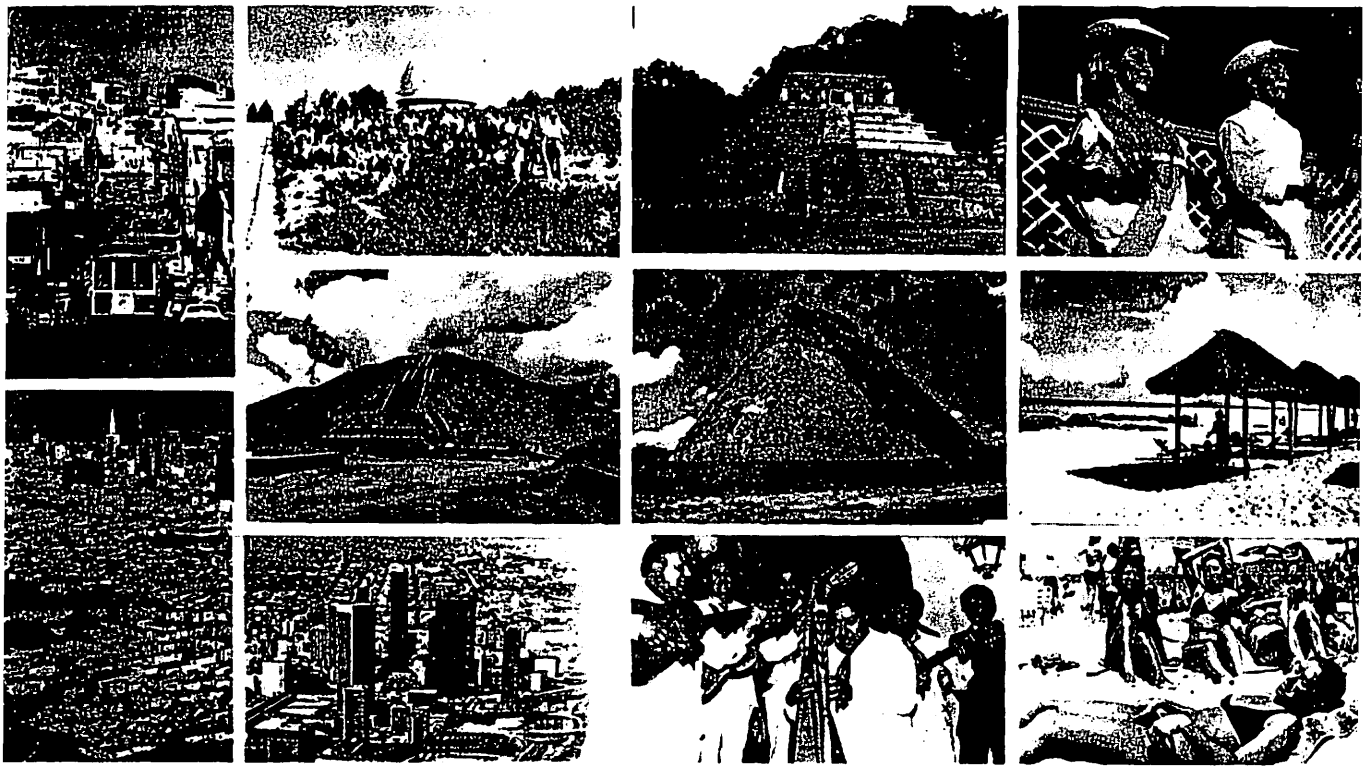
■61年8月5日→17日／13日間　■費用¥578,000（24カ月分割払可）　■詳細は案内書を。

●恒例の日本ＧＡＰ海外研修旅行は大好評裡に毎夏実施され、ふしぎにも全くトラブルなしに多大の成果をあげていますが、過去４年間はヨーロッパ・中東方面に集中しましたので、61年度は方向を転じて久方ぶりに４度目のアメリカ、３度目のメキシコ訪問の旅を行うことにいたしました。

●アメリカはアダムスキーゆかりの地で遺跡も残り、メキシコは太古のムー大陸の名残りと思われる謎とロマンに満ちた古代マヤの遺跡の宝庫で、エキゾチシズム（異国情緒）の溢れる陽気な魅力ある国です。

●今度は趣向を変えて８月５日に（アメリカは日本より日付が１日遅れる）西部随一の美しい大都市サンフランシスコに朝着陸、終日市内観光、同夜市内泊。翌６日はＵコンでおなじみのアダムスキー研究家ダニエル・ロス氏と会合、パーティーを予定。夜ロサンゼルスへ飛び市内泊。７日は専用バスでロスを出て一路南下、パロマー山へ登り、アダムスキーが暮らしたパロマー・ガーデンズ跡を見て、さらに山頂のパロマー天文台を見学。今回は大望遠鏡の主鏡部分まで行けるように手配予定。山を降りてさらに南下し、大軍港都市サンディエゴ泊。８日世界最大の野外動物園、シーワールド海洋公園などを巡遊。夜はメキシコ国境の町ティファナに一泊。９日にティファナより空路メキシコ市へ午後到着。ホテル直行後、自由行動。同夜市内泊。10日は市内観光後、市の北東50kmのテオティワカンにある雄大な太陽のピラミッドと月のピラミッドに登頂、市内の人類学博物館その他を見る。11日に市の南23kmの美しい水郷地帯ソチミルコへ行楽後、銀山の歴史的な町タスコを周遊。メキシコ市内泊。12日はメキシコ市発空路ユカタン半島のビリャエルモサへ飛び、ここからバスで古代マヤ民族の聖地パレンケの壮厳な遺跡を見学。同夜ビリャエルモサからメリダへ飛び、メリダ泊。13日にはバスでメリダ南方80kmのマヤ古典期後期最大のウシュマル遺跡群を見学後、コバ、トゥルムの各遺跡を周遊する。夕方カリブ海岸の新興保養地アクマルへ宿泊。14日は終日自由行動。信じられぬほど美しいエメラルドグリーンのカリブの海で海水浴。15日バスでカンクンへ行き、ここから空路アメリカのロサンゼルスへ昼すぎに帰り、ディズニーランドで遊び、夜のけんらんたる「光と音楽のショー」を観賞。同夜はディズニーランド泊。16日にロスより帰国の途につき、17日午後成田着、とまあこういうわけなのです。

●過去のアメリカ・メキシコ旅行と違って今度は見学場所が豊富で、しかも要点は押さえてありますから「楽しかった〜！」と歓声のあげっぱなしになるでしょう。ＧＡＰだけで過去７回（それ以前の出版社の旅行を加えると９回）世界の都市や遺跡を歩きまわった実績のある田中正と久保田八郎の名コンビが練りに練って企画したこの手作りの素晴らしい旅にぜひご参加下さい。



●企画　日本ＧＡＰ

●主催販売　ワールドセブントラベル株式会社
旅行代理店（運輸大臣登録旅行業代理店業1957号）

■案内書 下記へハガキでお申込下さい。

ワールドセブントラベル株式会社　田中正（宛）
〒150東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル２Ｆ
☎(03)499-2461
夜間と休祭日は(0462)63-0615（田中自宅）

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全７巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた救星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1. 宇宙からの訪問者
338頁　￥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第Ｉ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第II部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2. UFO問題の真相
262頁　￥2500

第１巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第II部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

3. UFOとアダムスキー
350頁　￥2500

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ｉ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第II部とした。

4. 宇　宙　哲　学
148頁　￥1300

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5. テレパシー開発法
190頁　￥1800

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の４官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6. 生　命　の　科　学
205頁　￥1800

アダムスキーが他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7. アダムスキー論説集
370頁　￥2500

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を綱羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第II部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻￥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆１冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。
☆第１巻より第３巻まで一括注文＝特別セット価格　￥7000（送料共）
☆第４巻より第７巻まで一括注文＝特別セット価格　￥6500（送料共）
☆第１巻より第７巻まで一括注文＝全巻セット価格　￥13000（送料共）

郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林　〒113 東京都文京区西片1-19-10、西片ハウス２Ｆ　☎(03)813-9561　振替/東京4-2521

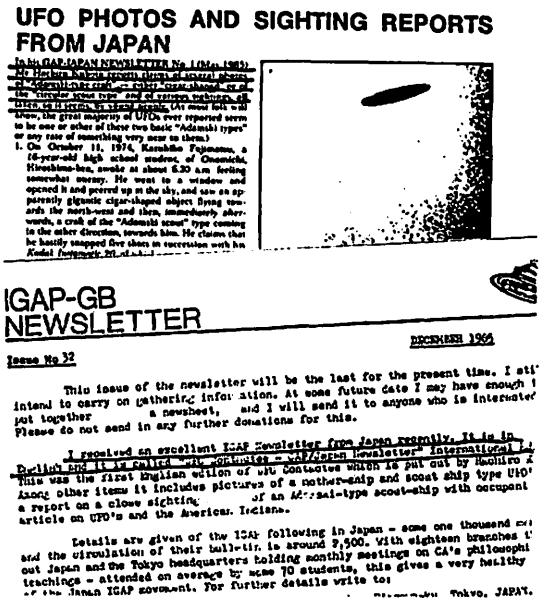
英文版UFO contactee No.2刊行

■60年７月に刊行したNo.１は世界のUFO研究会で絶賛を博しつつあり、長い伝統を誇るイギリスのUFO専門誌Flying Saucer Review誌、イギリスGAP機関誌ニューズレター32号、デンマークGAP機関誌 ufo contact その他が記事を転載して激賞している。また多数の欧米UFO研究グループと機関誌や情報交換のルートを確立、日本GAPは名実共に東洋最大のUFOと宇宙哲学研究グループとして一躍脚光を浴びるに至った。

■第２号も日本GAP・久保田会長が執筆した格調高い英文記事により、A Japanese Boy Who Went Aboard A Flying Saucer!、How To Produce Miracles、1985 GAP-Japan General Assembly その他の記事を満載。会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを駆使してオフセット版下を作成。デザイン、レイアウトから１字１句に至るまで会長が熱意をこめて作ったこの国際的文献をぜひお読み下さい。英語学習用にも好適。

Ｂ５判　12頁　最上質アート紙使用　￥300（送料￥170、５冊まで￥240、10冊まで￥350）注文は必ず郵便振替で下記へ。現金書留、切手代用はご遠慮下さい。

日本ＧＡＰ　振替・東京4-35912 ☎(03)651-0958



UFO PHOTOS AND SIGHTING REPORTS FROM JAPAN

IGAP-GB NEWSLETTER

DECEMBER 1969

Issue No 32

This issue of the newsletter will be the last for the present time. I stil intend to carry on gathering information. At some future date I may have enough t put together a newsheet, and I will send it to anyone who is interested Please do not send in any further donations for this.

I received an excellent IGAP Newsletter from Japan recently. It is in English and it is called "GAP-contactee - GAP/Japan Newsletter" International I This was the first English edition of the contactee which is put out by Mochiro K Among other items it includes pictures of a mother-ship and scout ship type UFO a report on a close sighting of an Air-sail-type scout-ship with occupant article on UFO's and the American Indians.

Details are given of the IGAP following in Japan - some one thousand and the circulation of their bull-tin is around 9,500. With eighteen branches t out Japan and the Tokyo headquarters holding monthly meetings on GA's philosophi teachings - attended on average by some 70 students, this gives a very healthy of the Japan IGAP movement. For further details write to:

Tokyo, JAPAN.

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会　費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日 午後1:30→6:00 ※61年2月より開始時間を2時から1時30分に繰り上げ。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP　☎03-651-0958	¥500	1:30→2:30 会員による体験講演。 2:30→4:00 久保田会長の「生命の科学」講義と近況報告、テレパシー練習、休憩。 4:00→6:00 自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日 午後1:30→4:00 ※4月は大会なるも月例会は実施。	長岡駅前「パークホテル」2F、ローズルーム ☎0258-36-2331 連絡先＝星富治夫　☎02579-2-5562 足立亘宏　☎0252-62-0968	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3F国際会議控室 連絡先＝喜多正宜　☎092-863-5438	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00→4:30 ※2月は16日、3月は9日、4月は6日に変更。	名古屋市中村区那古野1-47-1「名古屋国際センタービル」5F第2会議室。☎052-581-5678。国鉄・名鉄・地下鉄の名古屋駅より徒歩7分。 連絡先＝林　国宜　☎0586-45-6468 ※1月より上記に会場を変更。	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222-95-0725	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。 連絡先＝清水　正　☎0238-37-5635	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	¥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00→5:00 ※5月は大会のため月例会は中止。	静岡市駿府町「静岡県婦人会館」会議室。 ☎0542-54-5221。 連絡先＝野口敏治　☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室。☎0166-26-1304。 連絡先＝阿部　堯　☎01658-2-1585	¥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00 ※3月は大会のため月例会は中止。	奇数月：広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」5F会議室。 偶数月：松山市民会館会議室。 連絡先＝伊藤準夫　☎0898-22-3080	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3F。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	青森市堤町1丁目4-1「青森市文化会館」会議室。☎0177-73-7300。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00→6:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」1FA会議室。☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝新里義雄　☎09889-3-3695	¥500	テキストとして「生命の科学」と「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」第1研修室。☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492-65-0389	¥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2:00→5:00	水戸市梅香1-2「水戸市中央公民館」4F小集会室。☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:30→5:00	塩尻市大門7番町「塩尻市総合文化センター」第1会議室。☎0263-54-1253。塩尻駅下車、徒歩10分。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1F相談室。☎0735-21-2760。国鉄新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「生命の科学」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.89 主要記事「八ヶ岳に出現した円盤」秋山京子 / 「富士山麓にUFO頻出」高梨和明/ 「金星文字解読研究」遠藤昭則/「ノアの箱舟とアブラハム」久保田八郎/「アステロイド帯と月のクレーター」ウィリアム・L・ブライアン

No.90 主要記事「朝霧高原の不思議な"月"」伊藤遠夫/「「旭川にも月撮影UFO出現」石川晴道/「「高道市に出現したアダムスキー型円盤と母船」/「ムーンゲート第14章(完)」ウィリアム・L・ブライアン/「アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法」久保田八郎

No.91 主要記事「円盤に乗った日本人少年」伊藤遠夫/「ブラジル人教授の円盤搭乗事件」/「質疑応答」G・アダムスキー/「太陽系の惑星に知的生物が存在!?」/「地球の哲学と宇宙哲学の相違(2)」松原眞弓

各¥700 バックナンバーに限り送料は不要

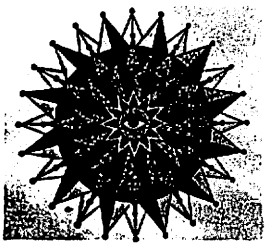
「生命の科学」解説講義録音テープ

昭和61年1月より1年間、東京月例研究会で日本GAP会長・久保田八郎先生が、スペース・プラザーの指導のもとにアダムスキーの名著「生命の科学」を新しい視野と清新な感覚をもって行う解説講義の録音テープです。テレパシー開発や宇宙的人間を目指すGAP会員必聴の重要資料となるものです。

テープ1本(90分) ¥1000 〒200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(1月分より在庫)。

〒430 静岡県浜松市三島町808-2 小島国弘
TEL.0534-42-3507 振替/名古屋7-51065



①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ペッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判・カラー写真)

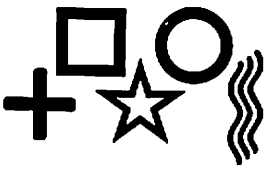
上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥600 〒120 ②¥300 〒60 一括注文の場合〒120

テレパシー練習用
③ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥600 〒120



——日本GAP——

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団!多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう!入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう!

——日本GAP——

編集後記

◐年頭に際しては多数の方から賀状を頂いて厚く御礼を申し上げます。今年こそは飛躍的な年にしようと毎正月に思うのですが、昨年はたしかにそうなりましたし、今年はもっと素晴らしい年になるような気がします。

◐「偉大な惑星から来た兄弟たち」と「サン・ピエトロ大寺院の異星人」は、それぞれ体験者が書いたもので、スペース・プログラムの実状を知る上で重要な参考文献になると自負します。熟読含味して下さい。

◐その他の記事も精選したものばかりで、読者に有益な情報を提供すると確信します。他にも掲載したい原稿が手元に多数ありますが、なによん四十頁ではいかんともなしがたく、次号以下にまわしたのもあります。

◐編者は科学記事の資料を求めています。新聞雑誌等に掲載された科学記事で興味深いもの、特に宇宙開発関係で有益な資料があれば、コピーをお送り下さい。助かります。

その他UFO目撃体験記、宇宙哲学実践体験記も、もちろん大歓迎しますので、遠慮なく原稿をお送り下さい。原稿を書くのが苦手ならば、当方から出張して対談のかたちで話を聞いた上で記事にしますからご連絡下さい。

◐次号にはまたも円盤が超低空で大接近して丸窓から人がのぞいたという高松事件に酷似した事件の記事を掲載します。ご期待下さい。その他、海外の珍しいUFO着陸事件も載せる予定です。

◐英文版Uコン第2号の発行が遅れて申訳ありません。超多忙で版下製作まで手がまわらない状態ですが、一月末か二月上旬には刊行の予定ですから、もう少しお待ち下さい。

◐本誌の会費切れの方はなるべく早目に継続会費をご送金下さるようお願いします。継続会費は次のようなサービス価格になっています。

一回分九〇〇円(送料二〇〇円共)
四回分三五〇〇円、六回分五〇〇〇円、
八回分六五〇〇円、十回分八〇〇〇円。

会費切れの方には本誌に通知書と振替用紙がはさみ込んであります。

◐六十一年度の東京月例会における講習テキストとしてアダムスキー全集第六巻『生命の科学』を使用しますのでご期待下さい。全国各支部もこれを使用されるようお願いします。

◐東京月例会は毎月第二土曜日の午後二時に開始していましたが、これでは時間不足のため全員自己紹介が不可能ですから、本年二月の月例会より開始時刻を三十分繰り上げて午後一時三十分としますのでご注意下さい。終了後は六時半より上野公園下のカフェハウス『蘆楽』三階で希望者による夕食会を開催します。会費は各自注文分を支払えばOKです。

◐本誌は約百名のボランティアの方により、東京と全国主要都市の書店に直接卸されています。営利事業でないために取次(卸し店)を通せないのです。宇宙的カルマを持つ人の発掘とスペース・プログラムに協力の意味で書店卸しにご協力下さる方はハガキでご一報下さい。説明書をお送りします。

◐アダムスキー全集の発行元である文久書林の所在地と電話番号が次のように変わりました(振替番号は従来どおり東京四-二五二一)。〒113東京都文京区西片一-一九-一〇、西片ハウス二階 電話八一三-九五六一 文久書林

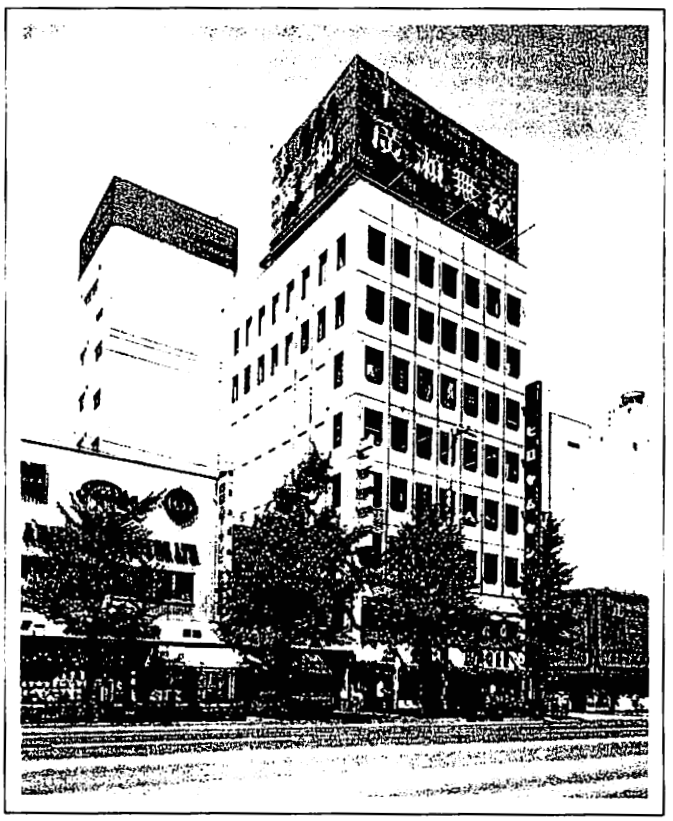
◐願然たる世の中ですが、宇宙的な生き方だけは失わないようにしたいものです。(K)

日本GAP機関誌・季刊 春季号
UFO contactee 92号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒113東京都江戸川区本一色町365-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
昭和六十一年一月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

UFO contactee 92号 昭和61年1月20発行 発行所 日本GAP 〒181 東京都江戸川区本一色町365-511 振替 東京4-35912 定価七〇〇円・送料200円

まごころこめて。

電子パーツ・マイコンからオーディオビジュアル家電製品まで



電化のデパートの名にふさわしく家庭電化製品はもちろんのこと、オーディオ・ビジュアル製品、照明器具、健康器具、海外旅行者用免税品、更には電子パーツ・工具類、パーソナルコンピューターまで電化製品ならなんでも取り揃えております。

クレジット大歓迎

ボーナス一括払いや、1～30回クレジットなど 手続きは とても簡単です。お気軽にご利用下さい。

あきはばら

ヒロセムセン

〒101東京都千代田区外神田1-10-5

☎255-2211(大代表)